

---

# Sternklare Nacht

唐沢 八江太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S t e r n k l a r e N a c h t

### 【Nコード】

N 5 8 8 7 I

### 【作者名】

唐沢 八江太

### 【あらすじ】

人を喰う精霊が棲む　そういわれ続けてきたモンデンヴァルトの森に、一人の少女が迷い込む。倒れていた少女を見つけたのは、当の人喰いといわれる精霊・エルフェの青年だった。精霊の歌を操る彼は、少女を殺さず自分達の集落へ連れて戻るが……

ヒトとエルフェ、魔法と歌、そして復讐と罪の記憶。

エルフェの歌うたいと人間の少女が紡ぐ、とある冬の物語。

## 序      N a c h t（夜）

「綺麗な夜だな」

金の瞳を星月夜にきらめかせて、男は呟く。傍らの少女も同じように空を見上げ、まだ少し欠けている月を目に映した。ほんの僅かな沈黙を破り、少女は白い息と共に、かすかな声で呟く。

「あたし、こういう星が煙るような日に産まれたんだって」

「ああ、それでか……名前」

何かに納得して、青年は口元をゆるませた。少女はそんな彼に視線をうつし、灰色の毛皮を直しながら尋ねる。

「ねえ、あたしの名前、なんて意味なの？」

「うん？ ああ……精霊時代の古い言葉だな」

二人の間を、風が吹き抜けた。

第一節 MondenWald (モンデンヴァルト) (前書き)

モンデンヴァルトにや踏み入るな

子供なんかが入ったら

おなかを空かせた妖精に

たちまち喰われてしまうのさ

ほーほーほーい、ほーいほーい

『ラウブ村のわらべ歌』より

## 第一節 Monden Wald (モンデンヴァルト)

しんしんと、雪がふっていた。

音もなく天より舞い落ちる白の華は、地面に降り立つとそのまま静かに積もってゆく。

そんな雪の夕方、妖精が棲むと噂される森の中を、一人で歩く者がいた。毛皮の服と帽子を身に着け、背中には弓と矢筒を背負っている。うす汚れたマフラーで鼻先までを覆い、時折立ち止まって辺りを見回す瞳は琥珀色、というよりも金色に近い。

灰がかった白と濃い影の色以外には、ほとんど何も見えなかった。この森は、冬になると生き物の気配がなくなる。真冬にここを歩くのは、エルフェと呼ばれる精霊たちの見回りくらいだった。もさり、もさり、という、くぐもった足音だけが、マフラーを手繰り寄せた耳元へ届く。

冷たい風に晒された皮膚の感覚は、すでに凍りついていた。精霊とはいうものの、体の感覚は人間と大差ない。時々握ったり開いたりしながら、手が動かなくならないように気を配り、歩き続ける。毛皮で出来た厚いブーツの中身も、かじかんで段々痛みだしていた。冬の見回りには、腰のナイフと背負った弓と、鍛えた感覚だけが頼りだ。

とはいえ、この深い雪の中に現れる者など、そうあろう筈もなかった。いつもどおり、という油断から、その存在に気付くのが遅れた。

「おあッ?!」

何かに足を引っ掛けて、バランスを保てずに雪の中に突っ込む。長年の経験で染み付いた習性から、かろうじて頭から飛び込むような醜態は晒さずに済んだものの、顔の半分が冷たい雪にまみれた。

「……？」

頭をふって起き上がり、足下に横たわっていたそれに視線を移す。引っ掛けた感触がなんだか柔らかかったが、と不思議に思ったそれは、茶を帯びた灰色の毛皮に覆われていた。

最初は、餌を求めて迷い出た鹿か何かの死体にみえた。昨日の見回りではそんなものは見かけなかったので、思いがけず新鮮な肉にありつけるか、などと考えたところで、間違いに気付いた。帽子を直しながら、体温で溶けた雪に濡れた髪をかきあげて、男は溜め息をつく。

半ば雪に埋もれたそれは、毛皮を纏った人の形をしていた。しゃがんで覗き込めば、まだ少女と違っていい顔立ちだ。それも、エルフェではなく人間の。その顔と耳の形を見て、男は一瞬、息を飲む。

……もう死んでいるのか？

人と分かって慌てて掘り出し、揺り動かしてみたがピクリとも動かない。

触れた頬は土気色、まるで体温を感じなかった。紫色の唇になかば諦めかけながら、男は遭難者の細い首筋に手袋を外した指を押し当て、脈を測る。指先に、今にも途切れそうなほど弱々しい鼓動を感じた。

………生きている。

だが彼のすむ集落までは、まだ大分距離があつた。何もしなければ、こんな少女の命などすぐに尽きてしまつたろう。

青年は首筋から手を放すと、彼女の体を再び雪上にそつと横たえ、立ち上がる。凍るほど冷たい空気をゆつくりと胸一杯に吸い込み、低い澄んだ声で歌い出した。

透き通る風に踊れし凍てつく気よ

大地にある母が御胸にしばしまどろめ

遙けき空に住まういと高き父よ

今ひと度我は願い、光望む

雲に隠れた慈悲の雨、大地に眠る命の火よ

我が祈りに耳かたむけよ 彼の子らの命の糸を

その御手による妙なる衣きぬの

織り糸にしばし留め賜え

紡がれる音に誘われるようにして、樹々の枝から小さな光の粒が集まり、意識のない彼女の周りをぼんやりと照らした。やがてそれらの光は、少女の胸のあたりからゆつくりとその体へ染み込んでいった。

青年は歌い終わると、再び少女の傍らに膝をつき、あらためて頬に触れてみる。皮膚は未だに冷たかったが、青ざめていたそこにわずかな赤みがさしはじめていた。

「ひとまずは大丈夫だな……後は、と」

ひとりごちて安堵の息を吐き、男は弓と矢立てを腰のあたりにつけ直す。それから少女の体を起こし、自分の背に負った。人間にしては軽いが意識のない体は、ぐったりとして重く感じる。

しばらく森の中を北東へと進み、やがて樹々が少しずつまばらになってくると、青年のすむ集落は近い。遭難者を拾ってからここまでは特に何も無く、ほぼ普段どおりだった。もう少しだ、と少女を背負い直し、足を早める。

安心しかけたその頬を、背後から矢がかすめた。思わず矢の飛んできた方へ目をやると、今度は怒号が飛んでくる。

「何者だ?!」

「ガイゲ? ……あの馬鹿っ」

馴染みの名前を呟き、振り返って怒鳴りかえす。

「シュネイだ、ガイゲ! いま森の見回りから帰った!」

「いやいやいや、んなのさすがのガイゲも分かってんだろ。その背中のに聞いてんだ」

「……ブランド」

同じような毛皮の服を着た、年恰好はシュネイと同じくらいの男が近付いてくる。シュネイよりはやや細身で、耳の先が尖っていることから、彼も同じくエルフェだと知れる。

「……答えられる状態じゃない。見つけたときは半分死体だったけ



ど、まだ生きてたから、軽く蘇生して連れてきた」

「ふーん……っておいおい、これ人間じゃねえかよ？　ったく、お前もこんなの蘇生すんなよな」

少女の丸い耳を軽く摘んで引つ張りながら、ブランドはあからさまに顔をしかめた。その手から庇うようにして向きを変え、シュネイは言い返す。

「死んだら何も訊けないだろ。真冬に人間が迷いこむなんて、何十年に一度あるかないかだ。長に相談して、何があつたか調べるべきじゃないのか？」

「ま、何にせよ長の判断次第だよー。狩人には見えないけど、もしそうなら殺して食べるだけだもん」

樹上から降りてきたガイゲが調子を合わせ、それもそうかとブランドが笑う。

「ま、シュネイの事だしな。村のもんがなんて言おうと、お前の見る目は間違いないえ」

「うんうん。ブランドよりはまず間違いないよー」

「んだと、ガイゲ、てめえッ」

「あでででっ、耳引っ張らないで、耳い！」

そんな二人のやり取りに思わず笑いながら、シュネイはほっと胸を撫で下ろす。

すると、背中にわずかな身動きを感じた。慌てて少女を背負い直し、じゃれあっている二人に告げる。

「そろそろ行くよ。見回りの報告と交替もあるし」

「そうだよ、僕らも仕事しなきゃー」

「おつと、あんまサボるとまたねーさんに怒られっしな。シュネイ、背中……気いつけるよ」

「……ああ」

「じゃ、またあとでねー」

ガイゲとブランドが持ち場に戻るのを見送り、シュネイは再び歩きます。

集落につくと、まずは見張り用の厚ぼったいテントのひとつで、シュネイは見回りの報告と交代を済ませる。それから見回り隊のリーダーであるドンネルと共に、集落の長のいるテントへ向かった。

人間を拾ったと報告すると、ドンネルはあからさまに嫌そうな顔をした。本人は人間が死ぬほど嫌いだと、普段から豪語しているほどだから、きつと見るのも嫌なのだろう。

だがそこはさすがに部隊長、すぐに捨ててこいとは言わなかった。シュネイの意見を聞き、最もだとうなずいて、自分と共に長のもとへ連れて行くよう言ったのだ。

ただし、そのぐつたりとした体を背負うのはもちろんシュネイで、さらに頭から毛皮をかぶせるように、との指示つきだったが。

集落の中でも一際立派なテントにつくと、この集落の長である老女が待っていた。小さな体に美しい刺繍を施された厚いマントを羽織り、物言わぬ木の如く静かに座るその姿は、幾星霜を生き抜いた巨木そのものの威厳がある。

ドンネルはその目の前に、背負ってきたものを横たえるように指示した。

「ミステルさま」

「わかっておる。人間、だな？」  
「……恐れ入ります」

シュネイがかぶせた毛皮をどけないうちに、ヤドリギの名を持つ彼女は中身を言い当てた。

だれも報告などしていないのに、と、その力におののきながら毛皮をめくって見せると、老女は灰色の目を見開いて驚く。横たわる少女の顔は、シュネイがかけた術のおかげで、大分生気が戻ってきていた。

「これは……なんとまあ……」

「いかなされました？」

「……いや……なんでもない。武器は？」

「ナイフを二本。それ以外には特に武器はありませんでした。こんな軽装で、狩人とは思えません」

少女から取り上げたナイフを二本、自分の服の懷から取り出して、ドンネルは軽く意見を述べた。シュネイはドンネルよりも一歩下がつて跪き、長の決定を待つ。

「いかがでしょうか」

「こんな真冬に、人間がモンデンヴァルトに迷い込むとは。……確かに異常な事態ではあるが、気絶しては何の目的で来たのか、わしにも読めんぞ。この女、しばらく介抱して、体力が戻ったら再び見るとしよう。何も無ければ森の外へ帰してやるが、邪心ありしときは、獣の宴に供そう」

「御意。して、この人間は誰が介抱するのです？」

「ふむ……ドンネル、お前がやるか？」

何気なく言われ、ドンネルはあわてて首を振る。

「そ、そんな……！ 私が引き受けたらどうなるかお分かりでしょうに！」

「冗談じゃよ」

老女はさもおかしそうにくっくつと声を出して笑い、ドンネルの慌てぶりを楽しむ。いつも厳しい部隊長のそんな姿に、シュネイも心の中で少しだけ、笑わせてもらった。

「さて、どうするか。人間を嫌う者は多いのう……そうじゃ、シュネイ」

「は、はい！」

話を振られるとは思っていなかったシュネイは、思わず上ずった声で答えてしまう。ドンネルは部下を横目で睨んだが、そんな彼の無礼な態度にも微笑んだまま、ミステルは提案した。

「拾ってきたついでじゃ、わしはお前が預かるのが一番よいと思うのじゃが……どうじゃ？」

「……分かりました」

森のエルフェにとって、所属する集落の長の言葉は絶対だ。提案の形をとっているとはいえ、逆らせるはずもない。シュネイは跪いたまま頭を下げ、言葉と共に了承を示す。

「よしよし。二人とも、ご苦労じゃったな。下がってよいぞ。……ああ、シュネイは少し話があるな。ドンネル、先にお前だけ下がるがいい」

「では……失礼致します」

出て行くドンネルが何故か気の毒そうな顔でシュネイを見やるが、  
気付かないふりをした。頭を下げたままのシュネイと、鎮座するミ  
ステルだけが二人きりでそこに残される。

一体何を言い出されるのかとびくびくしながら、シュネイは老女  
の口が再び開かれるのを待った。

## 第二節 Schatten (影) (前書き)

コインが両面とも裏であることがないように、影もまた影のみで存在する事はないのだ。

ただし、コインの面はどちらとも表になりえるし、どちらとも裏になりえるということを忘れるな。

『エーデルスタイン語録』

第六章 冒頭部分より

## 第二節 Schatten（影）

目を覚ますと、そこは見知らぬ場所だった。

動かすと少し痛む体をおして起き上がると、見慣れぬ厚い毛布がかけていた。無意識に毛布を押しやると、まだぼんやりとした頭で、ふいに寒気を感じる。自分の格好を見下ろすと、着ていたはずの毛皮が脱がされており、体は動かしやすい。だが暖炉を焚いた家の中で着るような、ほんの軽装では、この場所は寒すぎた。思わず身震いをする。

ふと何かが動く気配がしたのでそちらを向くと、背の高い人物が、なにやら赤くて小さなものを抱えて入ってくるところだった。外から帰ったばかりなのか、纏う毛皮に雪が積もっている。

やや日に焼けたような印象の浅黒い肌に、雪のように真っ白な髪をもった男だった。なにより目を引いたのは、帽子を脱いだ顔の横から生える、先の尖った耳。

人間じゃ……ない。

そうわかった瞬間、自分がいる場所がどこなのか予想がついて怖くなった。さらに幼い頃から親に刷り込まれた、恐ろしい人食い妖精の昔話が頭をよぎる。

「お？」

男がこちらを向いた。その瞳がきらりと金色に光る。そして手に持っているのは、捌きたてとみえる肉の塊。あれは、まさか……

「いやああああ！ 人殺しいー！ツ！」

少女はそばにあった木彫りの置物を引っつかみ、男に向かって投げつけた。完全な不意打ちに男はよけきれず、額に鮭をくわえた熊がクリーンヒットする。

かくて少女が命の恩人に向けた第一声は、大変に無礼なものとなった。

「……で、おれが凍死しかけてたあんたを助けたわけ。ちなみにあの肉は、たまたま今日見張りが狩ったトナカイで、ここの集落の皆で山分けにした中の、おれの配分ね。人間だってトナカイくらい食うだろ？」

延々と事情を説明したあげくの締めくくりの言葉に、顔を真っ赤にした少女がぎこちなく頷いた。男はその素直な仕草に笑顔をつくと、ストーブにかけたヤカンが沸騰したのに気付いて立ち上がる。

混乱して置物を投げつけてきた少女に、精神を落ち着かせるための歌を歌い、それでも質問をまくし立ててきたのに丁寧な答えて、シユネイはようやく冤罪を晴らした。

正直なところ、エルフェが人間にどう思われているのかはよく知らない。が、彼女が目覚めたのに気付いた途端、飛んできた置物には、さすがの彼も驚きすぎて、声すら出せずに撃沈されたのだった。



まだなんとなくひりひりする額を気にしながら、ヤカンからティーポットへ湯を移す。よい香りがたったところで、それを二人分のカップに注いだ。

「ほら、飲みな。とりあえずあつたまるし、落ち着くから」

取っ手のついた大きなカップに茶が満ちると、シュネイはそのひとつを少女に手渡す。おずおずと受け取った少女の鼻腔に、甘やかな香りがふんわりと広がった。その香りに釣られるようにして一口飲むと、染み渡る熱さが心地よかった。

これまでに味わったことなどないはずだが、不思議と懐かしい味がする。無言のまま半分ほど飲んだところで、その飲み物が何で出ているのか知りたくなり、つい口を開いた。

「これ、なんですか？」

「んー……その前にまずさ、あんたの名前を覚えてくれると助かる」

何もいわずにカップの中身を啜っていた彼女を、やはり黙って楽しそうに見守っていた青年が、目を細めて聞き返してきた。そう言われて初めて、少女は自分が名乗っていなかったことに気付く。

「ごめんなさい、まだ名乗ってなかったんですね。あたしはステルン……ステルン」ヒルシュです」

「ふーん、なるほど。あんたの親が古い言葉を知ってるかは知らないけど、いい名前じゃないか」

簡単に述べられただけの感想だが、褒められるとなんだかくすぐたくなって、ステルンは首をすくめた。ややうつむき加減で、シュネイから顔を隠すようにして、再びカップに口をつける。

「そうそう、これだけだね。ユヴェルの花の蕾を干したお茶だよ」  
「ユヴェル？」

「ああ、そっか。この草、人間は馴染みがないのかもな。このお茶には強壮や沈静の作用があつてね。香りがいいから、おれみたいに普段から飲むやつも多いけど」

おれみたいに、のところで、シュネイは軽くカップを持ち上げてみせた。

話していると、とても不思議な感じがした。エルフェのような人に近い精霊は、冥界で洗われた人間の魂から形作られる、という言い伝えがある。この少女と向かい合うと何となく安らいだ気持ちになるが、その感覚は今飲んでいる茶のせいばかりではないのだろうか。

まだ人間という生き物を見たことのなかった少年の頃、シュネイはその言い伝えを信じていた。人間とはどういうものなのだろうと想像し、大人たちに伝えられる歌からは、とても儚くて、見た事もないほど綺麗な生き物を思い描いていた。それはちようど、人間の子供がお伽噺から、蜻蛉の羽根をもった美しい妖精を想像するようなものだろう。

だが生きていくうちに人間という生き物を知り、そのたびに心根の醜さに絶望を覚えた。周囲の大人たちが人間を嫌う理由を、自らの経験で理解していた。そしていつしか、無邪気に信じた言い伝えさえも、記憶の闇に葬りさっていたのだった。

だから今回、自分がこのステルンという少女の命を助けたことがなんとなく奇妙に思えた。冬と違って夏のモンデンヴァルトには、よく人間が入り込んでいるのだが、それが「妖精狩り」だと判断するや否や、エルフェたちは容赦なくその命を奪う。

シュネイ自身も例外ではなかった。数え切れないほどの人間を殺してきたし、ステルンくらいの年の人間なら、害はなくても迷うまま放っておくのが常だった。いらついている時などは、初めから迷っているところを術で更に迷わせて、白骨になるまで放置したことをさえある。

もちろん、なにも知らないほんの子供が迷っていたのなら、どのエルフェも気付かれないよう、それとなく森の外へと導いてやるのだが。

「シュネイ……さん？」

「ん？ ……ああ……ごめん。一人暮らしだと、ボーっとしてる時が多くて」

もやもやと考えながらいつのまにか黙り込んでいたところに、声をかけられ正気に戻る。

「どれくらい、一人で？」

「うん、まあ、そうだな。もう六十年くらいになるのかな」

「ろくっ……？！」

「？」

彼にとつては当たり前のことに驚いたステルンに、シュネイは一瞬怪訝そうな目をむけたが、そこではたりと自分たちの寿命が人間とかけ離れていることに思い至る。

「あー、ほら、なんていうか。エルフェには人間と似たような体もあるし、食事も話す言葉も大して変わらないけどさ。一応、精霊つていわれるくらいだし。……おれたちはだいたい五百年、生きるよ」

「え……じゃ、若く見えるけど、シュネイさんって」

「見えるっていうか、実際若いよ。たしか今年の誕生日で百二十七

歳、かな？」

青年の実年齢を聞いたステルンが、なぜか目をそらしてぼそりと呟く。

「……おじいちゃんなんだ……」

「いやいやいや、人間で言ったら二十五くらいだから！　まだ若いよッ」

そろえた五指を顔の前で左右に激しく振って、即座に否定する。否定したが何故か、おじいちゃんと言われたことに焦りを覚える自分に気付く。十分若いはずなのに、一体何を焦っているというのか。考えてみて、そういえば最近、なんとなく抜け毛を気にするようになったあたりに思い当たって、空しくなった。

百二十六歳にして、若干二十歳にも満たない女性に本日二度目の撃沈。

ステルンが目を覚ましたのは、拾ってきた日の翌日であった。治癒の術をかけていたとはいえ、まだ十分に体力の回復していない彼女にひとまず食事を取らせ、薬湯を飲ませて眠らせる。

自分のベッドをステルンに貸したシュネイは、眠る少女を気遣って明るさを落としたランプの元で、木の枝を削り始めた。しなりの少ない硬い枝を、丹念にまっすぐ削っていく。

「……そんなに睨むな。不可抗力だろ、あれは」

手を動かしながら、置いてあるいくつもの彫像たちに、呟くように語りかける。睨むな、と言われたのは、ステルンに投げつけられた、あの熊の彫像だった。ちろちろと揺れる火の元で、心なしか挑むような目線をシュネイに送っているようにみえる。

「え、爪と牙が？ どれどれ」

作業の手を一旦止めて立ち上がると、シュネイは熊の彫像を手にする。置いてある場所は明かりからすこし距離があるので、作業していた位置へ戻り、丁寧に彫像を眺めた。すると確かに、鮭に食い込むように彫り上げられた右の牙がすこし、傷ついていた。よく見れば鼻の先にも小さな傷があり、爪の先などは突出していた分、欠けてしまっている。

「あー、本当だ。でもお前、熊なんだからこのくらい我慢しろよ。」

「……おれみたいに雄じゃないって？ 女の子は細かいなあ……」

彼らの習慣を知らないものが端から見ると、彼の行動は、木彫りの像で一人遊びをしているようにしか見えないかもしれない。

エルフェは狩人として一人前になると、自分の倒した獲物の魂を慰めるため、その姿をかたどって木の彫りものをするのだ。殺された獲物の魂たちは、低位の精霊となって彫像に宿った。そしてその精霊達と会話することで、エルフェは自分の感覚を磨いていく。

狩るたびにいちいち彫像を作るのは、自分が奪った命に対する敬意と感謝の気持ちを持つためでもある。自分が自然に生かされているという事を忘れずに伝え、また自惚れを自制しなければならない、という考えの表れだった。

「……次の宴か。いいや、お前はまだ供さないよ？ ヴィンデの頃からずっとおれを見守ってくれてるお前には……ちよつとまだ、離れて欲しくないんだ」

だが、何百年も生きるエルフェがそれを続けていると、たちまち自分の棲家が一杯になってしまふので、五年に一度、祭りを開いて彫像を焼く習慣があつた。獣の宴と呼ばれるその祭りで、エルフェたちは彼らの神に獲物の魂を還し、願わくば再び故郷の森に生まれてくるようにと祈る。全ての魂は水のように世界をめぐるっていると信じているのだ。

「仕方ないなあ……ちよつと待ってろ」

シュネイは近くに置いていた道具箱から、枝を削っていたのよりも小さなナイフを取り出した。装飾を施した鹿角の柄をつかんで、大事そうに皮製の鞘から剣身を滑らせる。

よく磨いた黒曜石の刃を輝かせて、美しい一振りが姿を現した。長年使い続けているそれは、すこし刃が磨り減つてはいたが、しっかりと手に馴染んでくる。獲物の彫像を作るときは、このような石の刃を持った専用のナイフが必要だった。金属の刃を使うと、獣の魂が金気を嫌って入り込めなくなるからだ。

先ほど削っていた枝から初めにそぎ落とした細い枝の、その皮をむいて白い地肌をだす。適当な大きさに切り落として、欠けた爪の先にあてがい、爪と切り出した欠片の両方を交互に削って、断面を合わせていく。

やがてぴつたり合うように整えると、見回りのときに持って歩いている小物入れから、小さな蓋付きの箱を取り出した。蓋を開けると、中から半透明のどろりとした膠が現れる。

欠片を切り出したのとは別の細枝の先で、膠をほんのひとすくい

だけ取り出し、折れた爪の断面をつつくようにして、少しだけ塗る。そこに先ほどあわせた木の欠片をつけ、しばらく手で押さえた。それから細い細い布切れを引っ張り出してきて、接着部分に包帯のように巻きつけ、縛る。

「よし、と。とりあえずはここまで。乾いたら、爪の削りと一緒に傷もまとめて消すからな」

彫像をもって立ち上がり、邪魔にならないところへ置きなおした。彫像はちよつと満足げな様子で、棚の上に黙って座する。彫像の修復に使った道具を元に戻しながら、ランプに照らされた足元へ視線を移すと、削りかけの長い枝が名残惜しそうに転がっていた。

「……あーあ。新しい矢柄、作っちゃおうと思ってたのに」

思わずそう呟き、軽いため息を漏らした。

毎度仕事で持ち歩く矢は、使えばもちろん折れたりして減るし、使わなくても持ち歩くうちに壊れてしまうことがある。何本か使っていたし、そろそろ点検と交換の時期だからと思ったのだが、思わぬ作業が入ってしまった。かといって彫像のほうを放っておけば、精霊に一晚中金切り声で叫ばれたことは予想がつく。

そうなれば大変な近所迷惑だ。もちろん、精霊がどんな大音量でわめいたところで、人間であるステルンは熟睡を貫くだろうが。

「……まあいいか、明日で。休みだし」

ふわあ、とひとつ欠伸をして立ち上がると、シュネイは大きな目の刷毛で木屑を入り口近くに掃きためた。矢柄を作るのに用意した枝をまとめて隅に置き、床に一枚毛布を敷く。一度外に出てスコップ一杯の灰を持つてくると、窯のなかでまだ勢いよく燃えている薪に

かぶせて、ストーブの火を小さくした。ついでにヤカンに残っていた湯で、出廻らしの茶を淹れる。

出廻らしでも十分に香りの立つ茶で体を温めた後、ランプの火をもう少し小さくしてから、毛布にくるまった。

穏やかな寝息が二つになるのに、さして時間はかからなかった。



### 第三節 Traum im Traum（夢のまた夢）（前書き）

ただ一つ言えたのは、

それは単なる夢物語でなく、

現実を知らせる予兆であつたことだ。

だが必死に訴える彼の言葉を、

王も、貴族も、平民も、卑民も、

誰一人としてそれを信じはしなかった。

『フレーゲルの道化師』

第四章より

### 第三節 Traum im Traum（夢のまた夢）

月が怖くて眠れないと、真夜中の焚き火番をしているシュネイの隣に座ったのは、まだ幼い妹だった。シュネイと同じ真っ白な髪と浅黒い肌をもち、澄んだ空のような青い目をした妹。

「お兄……」

「アーレ。……どうしたんだ、眠れないのか？」

「うん……あのね、なんだかね、怖い」

眠る前に見た大きな満月が、頭から離れなくなってしまったらしい。落ちてきそうだと不安そうに訴えた妹の手が、かすかに震えながらシュネイの腰布の端をつかむ。シュネイはうつむいてしまった。アーレの頭を、くしゃくしゃと撫でた。その手が妙に小さい気がして、自分のもののなのに、少し変な感じがした。

見上げれば青白い色をした月が、いまは遠く、天頂近くから二人を見下ろしていた。確かに何となく不安定で、落ちてきそうな気がする。

「歌、うたってやろうか？」

そういうと、妹はぱつと顔をあげて、目を輝かせる。

「おうた、歌ってくれるの？」

「ああ。そうしたら、眠れるだろ？」

「うん！ お兄のうた、大好き！」

まだ声変わりの完全に済んでいない声で、シュネイは妹の眠りの

ために知っている歌を歌いだす。人間の戦を伝える歌を歌うと、語りが進み焚き火の炎がはぜるたびに、物語の場面が浮かんでは消える。金色の炎が万華鏡のように次々とイメージを映し出すそれは、どこか現実離れしていて、とても美しいもののようみえた。

とても強い力を持った歌うたいである母親の血を継いだのか、シユネイは言葉を覚えたくらいの頃から、無意識に旋律に力をこめることが出来た。おかげで周りの歌い手たちにも期待され、たくさんの曲目や、力の使い方を叩きこまれてきた。やがて六十歳（人間で言えば十二歳くらい）になる頃には、既にそれなりのセングルとしての力は備えていたのだった。

「アーレ？ …… もう、寝たのか」

歌い終え、いつの間にか眠ってしまった小さなアーレを、テントの中に運ぼうとして抱きあげる。と、同時になぜか焚き火の炎が大きくなって、彼の視界を埋め尽くした。

不思議と熱くも、怖くもなかった。大きくなった炎はあたりを包み込み…… 気がつけばシユネイは、何処かの草原にいた。

晴れ渡る空のもと、気がつけば妹の姿は腕の中から消えている。その代わり、少し離れたところに別の人物が立っていた。見覚えのあるエルフェの少年だ。人間で言えば十六、七歳といったところか。それは唯一無二の親友の、懐かしい姿。

「…… フェデ、ル……？」  
「よう、シユネイ」

赤味の強い金色の、長い髪を風に波打たせて、少年はにっこりと微笑んだ。シユネイを見る、暁の空のようなすみれ色の目が、優しくに細められる。

「フェデルっ！」

駆け寄ってその肩を叩こうとしたシュネイを片手で制し、フェデルは首を横にふった。

「触るな。戻れなくなるぞ」

「……？」

「俺とお前の違い、分かるだろう」

言われてみてようやく、自分の目線が彼の頭よりも上であることに気付いた。共に過ごした頃の自分は、フェデルよりも大分背が小さくて、よくからかわれたくらいなのだ。思い出すと途端に気持ちが暗くなり、シュネイは力なく笑った。

「そうだよ……お前は、死んだん……だよな」

「はは、そう落ち込むなよ。お前のせいじゃないんだから」

ちよつと困ったように眉尻をさげる、いつもの笑い方で、フェデルは立ち尽くすばかりのシュネイを慰める。

「そつえばお前、人間を拾ったって？」

しばらくお互いに黙っていると、フェデルがふと思い出したように訊ねてきた。

「……ああ、そうだ」

「気をつけるよ」

「『気をつける』？ 何に？」

対するすみれ色が、見た事もない冷たさを帯びる。覚えのない眼差しの鋭さに、シュネイは思わず身震いをした。

「分からないか。覚えているだろう？ ああ痛みを、悲しみを、憎しみを」

「フェデル?!」

フェデルの体が、足元からどんどん黒ずみ、影のようになっていく。しかし本人は、まったく気にする様子がない。

フェデルばかりではなかった。いつのまにか景色はぼっかりとした暗闇に飲み込まれ、そしてシュネイ自身、体の一部が闇に変わっていた。消えていく自分に気がついて、シュネイは慌ててその影から逃れようともがく。

慌てるシュネイに、そんな事をして無駄だとしてもい wanna ばかりに、いつも穏やかに隣で笑っていたはずの親友の、その目が暗く嗤った。

『……忘れるな』

フェデルが、遂に片目だけになった姿でシュネイを見た。もはや見えなくなった口から、最後の一言をシュネイの頭の中に響かせ、その姿は完全な黒に溶けてしまう。

それと同時に、シュネイの視界も闇に落ちた。

「ッ！」

くるまっていた毛布を跳ね除けて、飛び起きる。

嫌な汗が背中を伝うのが分かった。無意識にこめかみに手を当てる。しばらく肩で呼吸をして、今いるのが現実であると全身で確かめた。まだ暗い朝の空気で、少しずつ頭が冷えてくる。

「まったく、なんて夢だよ……」

荒い息がようやく整うと、髪があちこち跳ねるのも構わずに、乱暴に頭を掻いた。

「一昨日、ミステル様にあんなこと言われたからかなあ……」

ぼやきながらのっそりと起き上がると、薄ぼんやりと輝くランプに手を伸ばし、少し弄った。火の勢いが増し、テントの中が明るくなる。

ストーブの窯を開けて、スコップで灰を掻きだし、まだ燃えそうな薪や火の消えた炭を選んで中に戻す。その上から新しい薪と炭を足し、小枝と干草の束に獣脂を浸したものを一緒に入れた。それからスコップを脇に立てかけつつ、ストーブにむけてちいさく鼻歌のようなものを呟くと、ぱつ、と干草に火がついた。小枝に燃え移るのを確認してから、蓋を閉める。

それから彼はテントの入り口の分厚い布を押し上げて、埃っぽい空気を入れ替えた。おとといとは打って変わって、空は晴れ上がっていた。箒を持ち出して、さきほど掻き出した灰の山を無言で外へ追いやる。隅においた愛用の弓の弦を張って、調子を軽く確かめてから、ようやく今日が休みだという事を思い出した。

久々にもらった休みだが、いつもどおりに起きて、つい武器の点検までしてしまったことに苦笑する。もしブランドやガイゲが休みをもらっていたら、まずこんな時間には起きていないだろう。

後ろを見れば、ステルンはまだ安らかな寝息を立てている。頬は赤みを帯び、見た目では健康そのものだ。つい二日前には真っ青な顔をして雪に埋もれ、死に掛けていたのが嘘のようだ。

しかしあの人気のない雪の中で拾われたのも含め、エルフェのすむ森に侵入しながらこうして無事生きながらえている事自体、かなりの強運の持ち主だと、シュネイは思う。エルフェが住んでいなくとも、そもそのモンデンヴァルトが大変危険な森である事は、近くに住む人間ならば十分に知っているはずだった。それをあえて入ってきたからには、何か理由があるのだろう。それとも、この華奢な見かけに反して、あの悪名高い妖精狩りだともいうのだろうか。

様々な憶測が頭の中をめぐるが、ため息をついてその循環を終わらせた。

ひとりで考えていても仕方がない。起きている所を長に見せれば、すべて済むことなのだ。

水がめに直接小鍋を突っ込んで水を汲むと、ストーブにかけた。切った肉と野菜を、塩と一緒にその鍋に無造作にいれてふたをする。茶色の皮をしたカルトヘ（芋）を洗い、別の鍋に汲んだ水にいれて小鍋の隣に置く。あとは適当な時間ほうっておけば、朝食の出来上がりだ。

朝食ができるのを待っている間に、夕べの彫像の膠が乾いたかどうかを見る。指先で動かすと、別段ぐらつくわけでもなく、しつかりとくっついているようだった。さっそく道具箱から石のナイフをもってきて、床に座り込んだまま削り始める。

さり、さり、  
り添った。  
といつかすかな音が、  
まだ太陽の低い朝の静寂に寄



第四節 V e r r i r t e r P f e i l (流れ矢) (前書き)

「あの輝ける太陽のもとで、我らを思い通りにしようなどとは。自惚れも甚だしいことこの上ないな」

彼は陽気な大笑いをして、カップに注がれたトウモロコシ酒をあおった。

『太陽の民・メイス』

族長エルツファテルの台詞より

#### 第四節 Verirrt er Pfeil (流れ矢)

朝食を終え、また床に座り込んで昨日の矢作りの続きをしていると、ステルンがあくびをしながら起きてきた。目をこすりこすりしながら、干草を布でくるんだベッドから抜け出してくる。

「おはよう。よく眠れたか？」

「おはよう、兄ちゃん」

「……兄ちゃん？」

「うん、ちゃんと寝たからいいよ。私もみんなと、もう大丈夫なの」

「えー……と？」

「だーからー、ちゃんと寝たら、いいの。兄ちゃんも皆も私も、だあいじょぶなのお」

なんだかいまひとつ会話が成り立っていない。というよりも、彼女が何を言わんとしているのか、シュネイには理解できない。

青年は寝ぼけ顔のステルンに苦笑しながら作業を中断すると、寝ぼけたままでまだ何事かをぶつぶつと呟いているステルンに、軽く上着を羽織らせた。それからその背を押して、テントの外まで連れて行く。

やってきたのは、飲み水以外の生活用水をためた大瓶の前だ。大きな木の蓋をどけて、四角い形の桶を瓶の中に入れて水を汲むと、隣にある木製の台にのせた。台はちょうど青年の腰くらいの高さで、ステルンの身長だと、その上で作業するのに丁度よさそうな具合ではある。

「ほら、顔洗えよ。目が覚める」

「んー」

促されるままに、少女は桶に汲まれた水に手を差し入れた。そのまま一度顔に軽くかけてから、次の瞬間、大きく目を見開いて飛び上がる。

「い……ったーいッ！ 何よこれ?!」

「あっはっはっは、顔にかけてから気付くとか!」

「ちよつと、何笑ってんのよ!」

飛び上がるのも無理はない。桶の中の水には、分厚い氷の塊が幾つも浮かんでいたのだ。ぷかぷかと浮かぶそれは、もちろん大瓶の中に張っていたものに他ならない。きんきんに冷えた氷水は、確かに少女の目を覚ますのには効果てきめんだったようだ。

「いやだつて、普通は手え入れたら気付……ぶはッ」

「最悪!」

白銀の髪に景気よく氷水をぶっかけて、ステルンはぶんぶんと桶を振り回しながら叫んだ。真っ赤な顔は、怒りの所為なのか、氷水の所為なのか。青年は、犬のように頭を震わせて水滴を払うと、子供のように声をあげて笑う。

「うつわ、冷てっ! …… あっはは、なんか昔を思い出すなあ」

「え?」

「いやいや、こつちの話。さてと、目が覚めたところで。朝めしの用意できてるから、中に入りな。……つと、その前に……そこにかけてある布で顔拭いて、な」

台にかけてある色柄つきの布きれを示し、自分は濡れ鼠のままでテントの中に引込む。ステルンは首をかしげながらも言われたと

おりに顔を拭き、テントの中に戻った。

ステルンの朝食に供されたのは、早朝にシュネイが煮込んでいた、野菜のスープと茹でた芋だった。ステルンにとつては、芋も野菜も見慣れないものだ。おまけに芋には蜂蜜なんか添えてある。スープはともかく、なんだ、このけったいな料理は。

おそろおそろスープを一口すると、野菜や肉の出汁が口の中でじわりと広がった。塩加減は少しきついが、蜂蜜で甘みをつけた芋と一緒に含むと、これもまた塩気と調和してなんとも言えず体が温まる。無言で木のスプーンを動かす様子を、料理を作った本人は床で枝を削りながら横目で見守っていた。

「うまいか？」

「うん……なんだかいつもと違うけど、おいしい」

「ならよかった。薬効のある草ばっか入れたから、元気はでるぞ」

低く穏やかな声が、スープの温かみと共に、少女に安心感を与える。いつの間にか丁寧語ではなくなっていたが、シュネイの方は気付いていても何も言わなかったようだ。なんとなく懐かしい印象を受けるのは、彼の気さくな態度のせいなのだろうか。

「食いおわったら、長に会いに行くからな」

「長？」

もうほとんど食べ終わったところを見計らって、話を切り出した。こうして気がついて、彫像を投げつけたり、氷水をぶっかけたりできる元気がある以上、早めに長に見せるべきだろう。

「この集落のリーダーで、森の統率者、かな。外からの来訪者がそ

の場所の偉い人に挨拶するのは、別におかしなことじゃないだろう。そこで、あんたが何のために森に来たのかを教えてもらう」

理由を伝えた途端、ステルンの表情が強ばった。シュネイは気付かないふりをして作業をつづける。

「昨日も言ったけど、もともとそのために助けたんだ。出来れば自分から教えてくれると助かるんだけど」

「……言いたくないわ」

「そつか。まあ、言いたくないのなら、黙ってればいいさ」

「え……いいの？」

思わず聞き返した少女の言葉に、エルフェの男はどこか楽しそうにさえ見える顔で、くすくすと笑う。

「その分、あんたの印象が悪くなるだけだよ。……エルフェが本来、人間って生き物をあんまり好まないって事だけ、頭に入れておいてくれば、おれは別に構わないんだけどね」

何を思っただけなのか、その言葉の調子から読み取ることとはできない。ステルンはスプーンの残りを、皿に直接口をつけて一時に飲み干し、木匙を置いて「ごちそうさま」といった。そのまま白い頭を見ると、何でもないことのように訊ねる。

「あなたも、人間が嫌いななの？」

「さあな。あ、食器はかまどの所に置いていてな。今、こっちも片付けるから」

さらりとはぐらかされて、少女は内心ため息をついて肩をすくめた。木屑を払い、立ち上がる男を横目に、少女は言われたとおりに

食器を片付ける。

「……そういえば」

「ん？」

「さつき、あたしがかけた水。テントに入ったらもう乾いてたよね。どうやったの？」

「あー、気付いてたのか。こうやったんだ」

掌を上にもうけて片手を前に突き出し、軽くハミングするように調子をつけて声を出すと、室内なのにふわりと風が舞う。その次の瞬間には、足元に散乱していた木屑がその手の上に球となって集まっていた。足元だけではなく、体についていた削りかすも、ひとつ残らず綺麗になくなっている。

「すっごーい！ 魔法？」

「魔法とは違うな。おれはセングルだから」

「セングル？」

「あー……歌うたいって言えばいいのかな？ 自然に祈りを捧げるんだ」

聞いておいてうまく理解できなかったらしく、ステルンは腕組みをして首をかしげた。

「どう違うの？」

「魔法は、魔法体系自体には法則や理があるが、自然の理は関係なしにねじ曲げて、従わせるものだ。セングルの歌は、祈りを捧げることで、世界の力を借りる。同じ結果でも、世界に与える影響が……って、あんまり判ってなさそうだな」

「うー……ん」

まだ頭をひねっているステルンに、シュネイはちよつと考えてから言い直した。

「んーと、無理やり従わせて使うのか、お願いして使わせてもらうのかって感じ。力を貸す方にとって、どっちの方が嫌だと思う？」

「無理やり」

「だろ。それが魔法。……まあ、あんたがそんなことにならないように願ってるよ。さ、上着を着て」

青年はストーブの火の中に、木屑の玉をばいと無造作に投げ入れた。玉はたちまち火に飲まれ、消し炭となる。ぱちぱちと燃える火が、嫌に嬉しそうだ。促しながら、自分も仕事のときに着る毛皮を羽織り、少女を外へ連れ出した。

広場から少し離れた、奥まったあたりにその大きな天幕は張られている。天幕とはいってもちよつとした屋敷のようなもので、土台や骨組みは普通の家のようにしっかりと組み立てられているので、単に昔の習慣が名残をとどめているだけのようだ。

「……シュネイ？ 長に何か用か？」

「ああ。例の娘が目を覚ましたから、連れてきた。話は通ってるはずだ」

「わかった。取り次いでこよう」

テントの前に立つ護衛と短いやり取りを済ませ、シュネイはうし

るを顧みる。ステルンが所在なさげな顔をして、あちらこちらから興味津々に顔を覗かせている子供たちを見ていた。親たちが必死で止めているらしく、視線はすべからく色とりどりのテントの中から飛ばされている。

子供たちには、お話で聞かされる凶暴な人間と、いま目の当たりにしている華奢な少女とが、どうしても結びつかないのだろう。ほとんどの子供が、「人間ってこんななんだ」と目を輝かせている。

「なんだか珍獣扱いね」

「扱いっていうか、珍獣だろ。人間にとって、エルフェが珍獣なのと同じだ」

「ちよつと、そんなこと」

「許しが出た。入っていいぞ」

ステルンの言葉をさえぎるようにして、護衛が顔を出す。シュネイは彼女の言葉など、まるで聞いていなかった風に、護衛の方を向いた。

「ああ、ありがとう。さ、行くぞ。長に失礼のないようにな」

道をあけた護衛にも奇異の目でみられながら、ステルンは改めてここが、自分の知る世界とは違うのだと感じた。どうにも居心地が悪いまま、シュネイについてテントに入る。

「ミステルさま、人間の娘を連れて参りました」

「おお、シュネイか。入りなさい」

「失礼致します」

仕切り幕の向こうから聞こえてきた、以外にも柔らかな女性の声音に、テントの中の一つ異様な空気にたじろいでいた少女は、小さ



く安堵の息を吐く。

シュネイの後について仕切り幕をくぐると、正面の一段高いところに、一人の老婆が座っていた。緑色の刺繍の入ったゆったりとしたケープを羽織り、穏やかに微笑むその姿は、歳を経ても失われぬ気高さと美しさを湛えている。これがエルフェの長なのか、とステルンは思わず、感嘆のため息をついた。

「ふむ……体調は良いようじゃな」

「ええ。薬草が思いのほか効いてくれたようで」

「お前の歌の力も大きいじやろうが……まあ、とにかく座りなさい」

ステルンは老婆の示した円状の筵に座る。シュネイはそこから斜めに一步下がった床に、直接胡坐をかけた。エルフェの長を目の前にして、少女は緊張に背筋を伸ばす。

「そんなに心配そうな顔をせんでも、この場でとって食ろうたりは сенて。わしはミステル。このヤーレスツイートのエルフェの長を務めておる」

ミステルは目の前の少女を安心させるように、こころと上品に笑って自己紹介をした。同じく名乗ろうとしたステルンに片手を上げて首を振り、話を進める。

「さて、まずはどうしてこんな真冬に森に踏み込んだか、聞かせてもらおうか？ 近くの村の者なら、どうなるかくらい判っておったはず」

穏やかな様子から一転して、有無を言わさぬ調子になる言葉。全てを見据えるような目は、嘘などついたところですぐに見抜いてしまいそうだ。ならば、とステルンは覚悟を決めた。震える手を膝に

押しつけると、毅然と顔を上げて答えを返す。

「近くのものではありません。ずっと西、リッスの村のものです。冬ならほかに人間はいないと、近くの村の者に」

「リッス、だと？」

思わず声をあげたシュネイを軽く睨んで制し、ミステルは黙って先を促した。

「……ご存知と思いますが、リッスは狩人の村です。私の父も兄も狩人でしたし、家族は皆、エルフェに殺されました」

「それで？ 復讐でもしたいのか？」

心を読まれているのだろうか。老婆の言葉は、質問の形をとってはいるが、確認のそれだ。穏やかな口調とは裏腹に、目の光は獲物に狙いを定めた鷹のようにするどい。ステルンは喉が詰まるような思いで唾を飲み込み、やっとのことであらずいた。

「それまでエルフェを狩っておいて、逆に狩られたからといって報復するのは身勝手ではないのかの。のう、シュネイ？」

「そう、ですね……」

ステルンの背後で、青年はうつむいていた。前髪にかくれた顔がどんな表情を形作っているのかよく見えはしないが、腿に置いて握り締められた手が震え、白く変色している。

「身勝手であるのは分かっています。父も兄も狩人である以上、覚悟はしていたはず。ただ……盲である母は関係なかった。私の目的は、母を殺したエルフェだけです」

「なるほど。エルフェに手をかけていない、母御のためか。それで

エルフェのいる場所を巡っておる」

「はい」

老女はやや目を伏せて、思案顔になった。しばらくしてから顔を上げ、軽いため息をつく。束ねた灰色の後ろ髪が、ぱさりと落ちた。

「ふむ……ならばもし、そのエルフェがこの集落にいた時はどうする？」

「決闘を申し出ます。他のエルフェは関係ありませんし」

「あんなナイフを二本ばかり持ったところで、どうやって戦うつもりじゃ」

「ひとつだけですが、魔法が使えますから。……それに大仰な武器を持っても、いたずらに事を大きくするだけでしょう？」

少女の言葉に、ミステルは同意を示した頷きを返す。

同胞を殺されたエルフェの多くが人間の全てを憎むように、エルフェを全て憎んでもおかしくないというのに。彼女の恨みはたった一人のエルフェへと向けられていた。それが確固たる意思であると分かったことで、老婆は娘に対する警戒を解く。ふと軽くなった空気に、ステルンは内心胸を撫で下ろした。

「この集落なら、どれくらいあれば探し終える？」

「十日ほどあれば十分だと思います」

「わかった。シュネイ、引き続いて協力してやるがよい」

「……人間の手伝いをしとおっしゃるのですか？ ドンネル隊長ではありませんが……何をするかわかりませんよ」

ステルンを見やりながら、シュネイは長に抗議した。

ミステルも、彼がなぜそう言うのかは分かっている。だが、それでも彼女は譲らなかった。深緑の瞳で若者を見据え、諭すように言

う。

「この者に狩人のような邪心がない以上、宴には供せぬよ。それにお前が手伝えば、十日よりは早くここから追い出せる」

「何故、おれなのですか！　よりによってリツスの人間など！」

遂に立ち上がり悲鳴に近い声で叫んだシュネイに、ミステルは穏やかとさえ言える声で、しかしはつきりと告げた。

「お前でなければならぬのだよ。それにこれは、恐らくお前のためにもなることじゃ」

「しかしっ」

「シュネイ、若者があまり年寄りを困らせるものではないぞ。掟を忘れたか？」

「……ッ……」

言外に命じられ、黙り込んでしまうシュネイ。だが、はたと場所を思い出して、しばし胸に手を当てて深呼吸をし、その顔から表情を消した。その場にひざまづいた青年に向かって、ミステルは静かにうなずいた。

「……わかりました。長の命とあらば、私情は控えましょう」

「よろしい。ではステルン。常にエルフェの監視の下にあること、無闇にエルフェを傷つけないこと、我らの掟に従うこと、そして十日以内に必ず集落を出て行くこと。これを条件にお前の滞在を許さうかね」

「あ、ありがとうございます！」

途端にステルンは笑顔になり、ぴよこんと頭をさげた。そんな少女をみて、老婆の口元もかすかに緩む。名乗り損ねたのに名を呼ば

れたことには、ステルン自身気付いているのかいないのか。

「よしよし、ではこれで一応の決着としようか。話はこれで終わりじゃ、二人とも下がってよいぞ」

ふたたびころころと可愛らしく笑い、エルフェの老女は話を締めくくった。エルフェの男がゆっくりとした動作で礼を取り、退室しようとして立ち上がると、人間の少女もミステルに頭を下げて立ち上がる。どこことなく嬉しそうに出て行く少女とは逆に、青年の足取りは重い。

「シュネイ」

「はい？」

その背に声をかけられ、シュネイは立ち止まって振り向いた。相変わらず真っ直ぐに見つめる老婆の視線が、悲しげにゆがめられる。

「すまんのう、つらい思いをさせる」

「いえ。それによく考えてみれば、人間とエルフェの慣習の違いをなんとなく知っているのは、おれだけですし」

首を横に振って力のない笑みを浮かべ、シュネイはミステルの謝罪をやんわりと否定した。

「そうか……そうじゃな」

「？」

珍しく目を泳がせた彼女に、シュネイは軽く眉をひそめた。が、すぐに長に対する無礼だと気付き、表情を引き締める。

「いかなされました？」

「いや……なんでもない。あの娘を、守ってやれ」  
「守る？ 人間を、ですか？」

いよいよもって不可解なことを言い出す長に、青年は首をかしげた。そんな彼に、老婆は説明を加える。

「エルフェを傷つけないと約束させた以上、こちらもある娘の言う決闘以外で傷つけてはならんじやろう？ 人間というだけで恨み傷つける者は沢山あるしのう。傷つければ報復を避けるため、帰さずに殺すしかなくなる。その者たちの手から守れるのもまた、お前しかおらんのじゃ」

重々しい口調で語る老婆に、複雑な顔でうなずくシュネイ。雪のような前髪がひと房、片目をおおい隠すようにして落ちる。

「そう、ですね……承知いたしました」  
「頼んだぞ」

まだ表情は暗く曇ったままであったが、シュネイはふたたび黙って頭を下げる。長がうなずいて見せると、彼女に背をむけ、垂れ幕をくぐった。

第五節 Ein blankes Schwert（白刃）（前書き）

あなたの握るその刃が、何のためにあるのか、七日七晩考えてみなさい。

『ヴァイツェス・リヒト説法集』  
第三十八節より

## 第五節 Ein blankes Schwert (白刃)

外に出ると、ステルンがシュネイを待っていた。護衛に睨まれて肩身がせまそうにしていた彼女はぱつと笑みを浮かべ、テントからでてきた青年に近づく。

だが彼はぼんやりとした顔で、するりと少女のわきを通り過ぎた。首をかしげてその背を追いかけて、服の裾を引っ張ったが無視されてしまう。シュネイ以外に知る人もないので、彼についていくしかできない少女は、仕方なしに後ろをついていった。

すると青年はテントの群れのある一帯を外れ、どんどん森のほうに入っていく。

きらきらと輝いていた雪面には黒い木々が青い影を落とし、まるで夕方のような寒さだ。しばらく歩いていくうちに、どんどん積もった雪が深くなってくる。それでも振り返る様子すら見せないのも、ステルンは痺れを切らして話しかけた。

「ねえっ、シュネイ！ どこまでいくのっ」

「……なんだ、まだついてきてたのか」

シュネイはようやく立ち止まり、後ろを振り返った。だがその言葉はあまりにもそっけない。

「まだって……シュネイ以外に知ってる人、いないもの」

「ああ、そっか」

それきりまた考え込むように黙り込むシュネイ。何があってもそん



な態度をとられるのか、少女には思い当たる節がない。

「何でか知らないけど、いきなりそんな態度とられちゃ、訳がわからないわよ。説明してくれば、納得も出来るだろうけど」

「……すまない、少し、一人にしてくれないか」

「ちよっ  
」

言い捨てると、白い髪青年は雪に溶けるかのように姿を消した。普通の人間であるステルンには、彼の姿を追う事はできない。

一人残されてしばらくその場に立ち尽くしていたが、やがて少女はとぼとぼと、もと来た道を戻りだす。雪の白さが、妙に目に染み  
た。

二人の若いエルフェの男が、集落に程近い森の中を歩いていた。談笑しながら歩くそれは、どうやら仲のよい友人同士のようなのだ。

そのうちの、背の低いほうがふと何かに気付いた。長い耳をぴくりと動かし、あたりを見回す。

「ガイゲ？ どうした？」

「ねえ、あれ……」

「ん？」

ガイゲの見ているほうに、彼も頭を向ける。すると少しはなれたところに、少女が一人で歩いているのが見えた。あんな子供がここで何を、とよくよく見れば耳が丸い。

「あの子、一昨日シュネイが背負ってた子じゃない？」

「あー……っていうより、なんで人間が一人にいるんだ。誰かしら見張ってなきゃならねえだろが」

「あ、ブランド！ 乱暴にしちゃだめだよ？！」

すたすたとステルンのところへ真っ直ぐに進んでいくブランド。

追いかけたガイゲの言葉が聞こえていたのかいないのか、彼女の目の前に現れたエルフェは、いきなり腰に穿いた剣を抜き放った。

「おい、人間。こんなところで何をやっている」

「……………」

出会い頭に切っ先を突きつけられる理由が分からず、ステルンは赤髪のエルフェを困惑の目で見上げた。それを挑戦ととったらしく、ブランドはさらに眦をつりあげる。

「なんだ、その目は。……やはり人間だな、身勝手な生き物め」

「だめだってば、ブランドっ！」

遅れてついてきたガイゲが、横から剣を思い切り叩き落した。こげ茶色をした瞳がブランドを吃と睨む。普段は穏やかな彼の大声での制止に、ブランドは驚いて後ずさった。

「人の話きけよ馬鹿！ いきなりそんな風にしたら、エルフェでもびっくりするに決まってるだろ！」

「う……すまねえ」

「相手が違う。僕じゃなくて、この子に謝ってよね」

「……………」

「あーっと、いきなりごめんね！。悪いやつじゃないんだけど、人間って聞くとこうなっちゃうんだよ」

無然とした顔で剣を拾い上げるブランドを叱咤し、持ち前の人懐こい笑顔でステルンのほうを向くと、強ばっていた彼女の表情がわずかにとける。

「僕はガイゲ、こっちはブランド。君は、シュネイに助けられた人間だね？」

簡単な問いに、少女はこくんとうなづく。

「どうして一人で歩いてるんだい。ここでは誰かエルフェがついてないと、自由には歩けないっていう決まりがあるんだけれど……知ってた？」

「ええと、あの……その、シュネイが、どこかに行ってしまったて……」

再びうなずき、ステルンはようやく言葉を発した。やはりすこし戸惑うような小さな声ではあったが、エルフェたちの耳には十分とどく。

「何かあったかな。ブランド」

「ん」

「この子は僕がしばらく監視役になるから、シュネイをさがして。何があったか分からなきゃ、話が進まない」

「わかった。油断して殺されんなよ」

「馬鹿にしないでよ。油断してたって、人間に殺されるほどのろまじゃない」

ぷう、と子供のように頬を膨らませてみせたガイゲの様子に笑って、ブランドはやはり雪の森に溶けこむように姿を消した。風のよ

うに居なくなつた青年を見送ると、呆然とブランドの消えたほうを見ていたステルンに声をかける。

「あはは、驚いた？ あいつは森の中に姿をくらますのがうまいんだ」

「エルフェって……みんなあんな風に消えるんですか？」

「うーん、僕はそうでもないけど……あ、でも人間から見たら、やつぱり消えるみたいに見えるかもねえ」

のんびりとした口調でそう答えたガイゲは、ふと目をやった少女の手が、かすかに赤く震えているのに気がついた。集落のすぐ近くとはいえ、木の陰になるこのあたりではさすがに寒い。

「とりあえず、あつたかい所に行った方がいいね。女の子にはちょっと失礼かもしれないけど、僕のうちで大丈夫かな」

他に場所もしらないので、ステルンはうなずいた。ガイゲは自分の腰につけていた袋から予備の手袋を出して、ステルンに渡してやる。すこし大きな毛皮の手袋は、かじかんだ手に暖かった。

森の中を歩くうちに、どこからか歌声が聞こえてきた。それは穏やかな曲かと思いきや、一変して荒々しく奇妙に調子を転じていく、森の神へ捧げられた歌。馴染みのあるその旋律を捉えた男には、それが雪色の髪の友人の声だとすぐにわかる。明るい空色の目を歌の聞こえる方に向けて、ブランドはさくさくと雪を踏んだ。

「こんなトコにいやがったか……」

歌はとある高台から聞こえていた。森を一望できる、三人のお気に入りの場所だ。

「おい、シュネイ。シュネイ？」

近づいたブランドが話しかけても、旋律は止まない。赤髪の男は白いため息を吐いて、仕方なしに近くにおいている丸太へ腰かけた。力強さと繊細さをそなえて響き渡る歌声に、目を閉じてしばし聞き入った。高く、低く、声の主が自在に織り上げていく音のタペストリーは、芸術にとんと縁のない男の耳をすら魅了する。相変わらずすげえな、とブランドは密かに心の中で賞賛を送った。

やがて歌は終わり、ぼんやりと金色の瞳がブランドを見おろした。視線に気付いた青年は、立ち上がって彼を見つめる。

「……………」

「ああ？ 何だよ。俺の顔がどうかしたか」

「……ああ、いや、えと……なんだか、ちょっと」

「何がちょっと、だ。人間から目え離してどっか消えやがって。見つけたのが俺とガイゲじゃなかったら、どうするつもりだボケ」

自分がその人間を殺そうとして止められたことは、すっかり棚に上げてまくしたてるブランド。言われたシュネイは、そんな事は露ほども知らないので、うなだれて覇気もなく謝る。

「すまな、い……」

「謝ったってやっちゃったらもう、仕方ねえだろが。ちったあ後の

こと考えろよな」

ひととおり暴言を吐いてから、男は友人の目を心配そうにのぞきこんだ。虚ろげな目には彼が映り込んではいないが、映してはいない。その瞳の奥で何を考えているのかまではよく分からない。

「んで？」

「え？」

「何があつた？ 俺はミステル様と違って、心ん中は覗けたりしねえ。お前の口から話してもらわねーと、俺たちはお前を慰める事だつてできねえんだよ」

真摯に見つめてくるその視線を受け止められなくて、シュネイは目をそらす。

「……」

「殴られなきゃわかんねえか？ それとも信用できねえか？！」

半ば脅しをこめて胸倉をひつつかむと、シュネイはびつくり顔で目を見開いて、赤髪の友人を凝視した。それから軽く眉をひそめて襟ぐりをつかむ手を軽く叩いて下ろさせる。下ろされたシュネイはコートの襟を直しながら、ぼそりとした声で答えた。

「……あの娘が、リッスの出身だと聞いて」

「リッス？」

突然出てきた名前に、ブランドはどこだそれ、とでも言いたそうな顔でシュネイを見た。白髪の青年は、友人の記憶力の悪さに思わずため息をつく。

「前に言つたろう。恨みに囚われて、おれが滅ぼした」

「ああ、あれか。……ん？　つてことは何か？　あの人間は、復讐のために来たとでも？」

「そのとおりだ、まさに。それでおれは、ミステル様の命で……犯人探しを、手伝うことになった」

「はあッ?!」

あんぐりと口をあけたまま、呆けたような顔になるブランド。思わずあげた彼の大声に、近くに生える何本かの木から雪の塊がすべり落ちた。

「犯人つて、ミステル様、知ってんだろが」

「もちろん知つておられるだろうさ。だけど、それでもおれに手伝えと命じられた。守れとまで」

「守れ、つて……そんな、なんつーむちゃくちゃな」

「なにかお考えがあるのだろうけれど、おれはなんだか……近くにいられなかつたんだ」

頭痛を抑えるときのように、シュネイは額に手をあてて首を振る。ブランドはなんだかいたたまれなくなり、目をそらして頭をかいた。しばし無言の時間が続く。

「……でも確かあれ、お前だけじゃねえだろ」

「そうだけど。でも、覚えてるんだよ……確かに、目の見えない女が一人いた」

慰めようとした言葉に眩きのように答えて、銀髪の男はうつむいた。くもりひとつない雪が目にも痛い。隣で今度はブランドが、眉をひそめて大きなため息をついた。

「ったく。俺らなら気にしねー事でも、お前は気にすんだな」

「そりやおれはお前じゃないから」

「そうじゃなくて、普通人間殺したって何とも感じねえぞ。なのに  
お前は、何でか知らんが悪いと思ってるんだな、って事」

「……え？」

思いがけない言葉に、一瞬自分の耳を疑った。が、ブランドはそんなシュネイにちよつと訝しげな顔を向けたままで、言葉を続ける。

「だってそうだろ？ 人間なんてどいつが死のうが生きようが、関係ねーもん。そりやエルフェ殺しちまったら、めっちゃめっちゃ気になるだろうけど……例えば思いがけず殺したとして、あ、やべ、仕方ねえから今夜の夕飯にすつか、ぐらいにしか思わねー」

「う……そう、なのか……？」

「つか別に気にする必要なくねえ？ とりあえず自分が殺される心配だけしろよ。そんなに気になるなら、要はバレなきゃいいんだろ？」

なんだか慰める方向がずいぶんおかしいような気がしたが、そう思うのも彼に言わせれば奇妙なのだろう。やはり自分はおかしいの  
だろうかと思いつながら、シュネイはだんだん痒くなってきた自分の  
耳先を、帽子の外に引つ張りだした。

そろそろ行こうぜ、と立ち上がったブランドに向けて、少しぼんやりとした顔で問う。

「なあ、お前はおれのこと、どう思ってる？」

「なんだ急に。気味悪いな」

「いや、なんとなく気になって。おれが流れてきたとき、初めに味方したのブランドだしさ」



唐突にたずねてきたシュネイに、青年は首を軽く傾け、片眉を上げて返した。

「ちょっと変だけどすげえ大事なダチ。まだいろいろ隠してるっぽいのは気に喰わねーけどな」

さらりと言ってから、照れ隠しのつもりかブランドは背を向ける。しばらく言われた言葉を頭の中で反芻していたシュネイは、ようやく笑って立ち上がった。先に歩いていたブランドの背を追いかけて、立ち止まった彼の肩を叩いてそこに額を寄せる。

「ごめん……ありがとな」  
「気にすんな」

素直に礼を言う友人の頭に、ブランドはぱんと手を置いた。

第六節 N e s s e l s u c h t n a c h h o h e m F i e b e r (風花)

風に吹かれた雪の花が晴天に舞う。風花、というんだ。

なんとも素敵な言葉じゃないかね？

『ブルーム・ブラウテの愉快な旅』より

ガイゲのテントは、シュネイのテントよりも数段きれいに片付いていた。

すのこのような造りの床はきちんと掃き清められ、赤い染料で紋様の描かれた敷物には、目立った汚れも見当たらない。棚や家具らしきものも整然と並べられている。女の子に失礼、と彼は言ったが、これが駄目ならシュネイの家はどれだけ失礼なんだろう、とステルンは思った。

ガイゲは入り口側の地面においてあるストーブのふたを開くと、薪を数本と干草を入れて、奇妙な輝きをもつ赤い石をひとつ放り込む。するとストーブの中に、明るいオレンジ色の火が咲いた。それから衣装箱のそばにあった毛皮の敷物を引っ張り出し、もじもじと立っていた少女にすすめる。

すすめられるまま、ステルンはその毛皮に腰を下ろした。その間にガイゲは小鍋に汲んだ水をストーブにかける。

「少ししたら、すぐあつたかくなるからー。ごめんねー、何もないから冷えやすいんだ」

「い、いえ……」

「あはは、そんなに固くならなくていいのにー。あ、僕の事はガイゲって呼んでよ。それに敬語も使わなくていいからねー?」

ガイゲはシュネイやブランドよりもいくぶん背が低く、すこしばつちやりとした外見はどこか親しみやすい。話し方も穏やかで、森の動物やエルフェの子供たちについてのたわいもない話を聞くうちに、初めは身構えていたステルンもいつしか打ち解けていた。

「……そういえばブランド、ちゃんと見つけれたかなー」

話が自然と途切れたところで、ふと入口の方に目を向けて、男はそんな言葉をもらす。

「シユネイの……？」

「そうそう。まあ、歌って身を隠されでもしない限り、すぐ見つかるだろうけどねー」

ガイゲはあまり心配していなさそうだが、ステルンにはその言葉がすこし気になって、好奇心のままに尋ねてみる。

「もし歌ってたら？」

「一生かかっても見つけれないなー。あいつが本気で歌ったら、僕らでは絶対に敵わないよー」

「……そんなにすごいの」

意外そうな顔で眉をあげた彼女に、ガイゲはそんなことありえないけど、と笑った。

ステルンのカップの中身が減っているのに気づき、ガイゲは茶のおかわりをすすめてくる。少女はありがたく二杯目を貰うことにし、残りを一気に飲み干してカップを差し出した。

「あいつさ、もともとはこの集落の出じゃないんだよねー」

「え？」

「詳しくは僕も知らないんだけどー。ほら、肌の色とか、僕やブランドとは全然違うでしょー？」

カップに注いだ二杯目の甘い茶を手渡しながら、彼はわずかに目

を細めて言う。

あまり気にしていなかったが、言われてみれば確かに、この集落で見かけたエルフェたちの肌は白いし、髪の色も比較的濃い。シュネイだけが、褐色の肌に銀髪という、正反対の色をしていた。

「僕が知ってる歌では、そんな姿を持つのはずっと南のエルフェなんだよねー。それも、ちょっと特別な」

「じゃあ、シュネイもその、南のエルフェなのかしら」

「それは分らないよー。たまたま歌われているのと合ってた、それだけかもしれないしー」

冗談めかして笑いながら、ガイゲは一口茶をすすり、それから思い出したようにぼそりと呟く。

「……ただ、その神話に匹敵するくらいの力を持つてるのは確かかなあ」

「神話？」

興味をひかれた様子で身をのりだす少女に、彼はしまった、と口に出した。だが時すでに遅し、ステルンは興味津々でガイゲの顔を見つめている。ガイゲはつかつか自分自身にため息をついて、低く唸った。

「うー、やつちゃったよ……まさか人間相手に語り歌うわけにもー……」

「？ シュネイは目の前で歌ってたわよ？」

「ええ？ ……ああもう、シュネイってば！」

左右に頭を振って、呆れ顔になるガイゲ。……おおかた何か片付けるとか、火をつけるとか、そんなことで歌ったに違いない。思わ

ず大きな声をあげたガイゲから、少女がわずかに後ずさった。

「ってことは、もしかしてセンゲルの事は聞いているの？」

「もしかしくなくても聞いているわよ。歌うたいだって、シュネイは言  
ってたけど」

「うーん、正確には昔話の語り手、みたいなものなんだけどねー」

「その神話、聞いてみたいなー、なんて」

「いや……でも……。ちよっと人間には、刺激が強いんじゃないか  
と思うんだよねー……」

「どうしても、だめ？」

いかにも自信なさげに呟いた彼に、ステルンはいたずらっぽく上  
目遣いでたずねてみる。するとガイゲは観念したのか、両手をあげ  
て首を左右にふった。

「ああ、もう、分かったよ。昔語りって言っても人間とはだいぶ違  
うだろうし、驚くだろうけどね」

センゲルの力が殆ど人間に知られていないのは、彼らが本来、そ  
の力を人間に見せるような場面で使わないからだ。ガイゲがいうよ  
うに、歌は彼らの語りの手段である。魔法のようには見えても、も  
ともとは攻撃向きの力ではないのだ。

ガイゲは厳かに目を閉じ、呼吸を整える。意外と長いその睫毛が  
伏せられる様は、親しみやすい人柄とはいえども、彼が精霊の一族  
であることを見せつけた。ステルンはちよっとした疎外感のような  
ものを感じながら、彼の口から言葉が放たれるのを待つ。

大きく息を吸った男の口から、やがて旋律が紡がれたした。

世界のはじまりに時ありき 時の中に闇ありき  
闇は光を生み 闇と光は暁と宵を生む

四神は世界を生みたまい  
世界は我らの揺り籠となる

我らは風より生まれ出で  
風と共に渡りて生きる

故に風渡りの名 エルフェの名をいただく

さて これより語るは我らの同胞

風を友とし 歌を伴侶とした一族の名

前口上を歌い上げ、ガイゲはひとつ息をつく。シュネイのような  
軽いハミングではなく、本当のエルフェの「歌」。人間の歌手とは  
まるで違う音の重なり、少女はなにか酔いにも似た軽い眩暈を覚  
えた。

初めに風を纏いし神は  
空を臨めるラウム  
雨に荒ぶるストルム  
大いなる風抱くヴィンド

ストルム その荒き気性に狂いて神々の糧となり

ラウム その翼で高き空の彼方へ消えゆく

歌を奏でしヴィンド

世界を渡りゆく彼の神のみ

ひとり大地に残さるる

「きやつ……?!」

ぐらり、と視界が揺らいだように感じた。

思わず目をつぶるが、とくに何も起こらない。だが、おそろおそろ  
る瞼を開くと、そこに知らない世界が広がっていた。ステルンは思  
わず目をこすったが、ガイゲの歌声がはつきりと聞こえている以外  
には、何もかもが変わってしまっていたのだ。

歌と共に雷を纏った大嵐が吹きぬけて消え、猛禽に似た巨大な鳥  
が天高く羽ばたく。そして一人の少年が、鳥の去った緑の草原に残  
された。風に白く長い髪をなびかせ、金色の目を悲しげに空へ向け  
ている。褐色の耳が尖ったその姿は、心なしかシュネイに似ていた。

白き髪のヴィンド 時を経て

やがて我らの祖となりき

歌生みし その体は風より出でて

朽ちし魂は風へと還る

風の神より創られし我らも

また 風に還る定めとなる



我らは風とともに散る  
歌を伝え大地に留まる  
かの神の骸なり

めまぐるしく雲が流れ、草原に立って空を見上げていた少年は、  
いつしか青年となった。彼が歌うように何かを呟くと、草原に吹く  
風が集まって色をもち、形をもち、そして人の姿になった。

それはまさに、今に生きるエルフェの姿だ。

青年に形作られたエルフェたちがやがて数を増やしていくと、彼は満足そうに笑みを浮かべて目を閉じた。その体がふわりと空気に溶け、後にはなんともいえぬ美しい玉石が残される。彼の後を追うようにエルフェたちもまた眠りににつき、風に溶け、そしてその後には必ず宝石のような美しい石たちが残された。

やがて屍となりし風

その名を冠せし一族は 今も渡りて留まらず

その姿は風神の鏡 黒のからだに銀の冠

歌においてはまさに かの神を思わせ

堕ちた死者は罪を悔い 悪しき魔ですら涙する

青年の後に残された石が二つに割れ、それぞれが黒い肌に白い髪をもつエルフェになった。それは男と女のエルフェで、気がつけばいつの間にか異形の怪物たちが彼らを取り囲んでいる。しかし彼らが歌うような仕草をすると、怪物たちの体がぼろぼろと崩れ、そこから光の粒が無数に立ちのぼり、空の彼方へと消えた。

時の流れに失われゆく 風神ヴィンデの旋律よ

エルフェたる所以の旋律の 正しき力を継ぎし者ども

その名はヴィンデ 風神の血族よ

怪物を退けた二人のエルフェが天に手をかざすと、視界は白い光に覆われる。

真っ白になったそこに、歌の余韻だけが残った。長い歌を締めくくると、ガイゲはひとつ息を吸い、大きく吐く。

ステルンはいえ、歌が終わったにも関わらず、現実と幻の境に視線をさまよわせていた。そんな少女の様子をみて、ガイゲはぽりぽりと頭を掻く。

「ありや。音の震えを抑えれば大丈夫かと思っただけ……そうでもなかったか」

ん、と短く唸ってから、ステルンの目の前ではんっ、と両手を合わせてみせる。存外に大きな音が出て、ぼんやりと宙を眺めてい

た少女は我にかえった。

「きゃッ！……あ、あれ、あたし……？」

「ごめんねー、こんなに効いちゃうと思わなかったから」

「え？」

眉尻を下げて謝るガイゲに、何のことやらよく分からない彼女はきよとんとしてその瞳を見つめかえす。

「音を使つて体感させる、これが僕らの伝え方なんだよ」

自分たちの語り伝えは、耳からの旋律と共に、語り手の思い描く物語を見せる幻なのだ、と男は言った。

「幻……？ えと……でもいま、どこか知らない場所にいたような……」

「そう、それ。エルフェでもそう見えるんだけど、僕らは幻と現実の区別がすぐにつくんだ。先にちゃんと説明すればよかったね」

そういつてから、ガイゲはすっかり冷めてしまった茶を一口飲んで、乾いた喉を潤した。そんなガイゲの顔を見つめる少女は、ハシバミ色の目を真ん丸くしたまま、まだどこことなく理解できていなさそうな様子だ。

「言葉に力があるわけじゃないから、それだけなら幻は見えないんだ。言葉だけで言えれば良かったんだけど……ごめん、歌わないとちゃんと出てこなくて」

続けざま自分を揶揄するようにそういうと、彼は苦し紛れといった感じで笑う。

少しの間をおいて、ステルンはようやくその意味を飲み込んだ。つまり、旋律の方に幻を見せる力があるのであって、歌詞はあまり幻には関係ないのだ。けれど恐らく、ガイゲの覚えている歌が多すぎて、曲と一緒にないと物語がすんなりと出てこないのだろう。

「そんなにあるの？」

「うん？ 何が？」

「歌。歌詞だけじゃ覚えられないくらい、なのよね？」

「ああ、うん、まあね。それが普通なん」

ぴくり、と耳を獣のように動かし、エルフェの男は弾かれたように顔を上げた。入り口のほうを振り向いてじっと見据え、何かを探ろうとするように黙り込む。

もちろんステルンには、何が起こったのかなど分からなかった。

突然言葉を途切れさせ、危険を察知した獣のような動きをみせる彼の様子に、ひどく戸惑う。

「……ガイゲ？」

「しっ。………村が、襲われてる」

「え？」

「くそっ、影か……！ ……ステルンちゃん、僕が戻ってくるまで、絶対にこのテントから出ないでくれるかな。いい？」

言いながら立ち上がり、脱いでたたんであった毛皮の外套を再び着込む。帽子を被り、弓と矢筒を携えると、焦げ茶色の瞳を鋭く光らせて入り口へ向かった。

「あ、あの……何？」

「ごめん、説明してる暇はなさそうだ。とにかく、ここを動かないでほしい」

「う……う、ん……」

幾分か抑えてはいたが、その強い口調に何も答えられず、ステルンはこくりとうなずく。それを見ると一度だけ口元を綻ばせて、ガイゲは外へ飛び出していった。

第七節 Blauer Himmel (青空) (前書き)

晴れ渡る空、流れる雲。

風に遊ぶおまえの髪が、澄んだ光の冠で彩られる。

『空の下で』

第七章より

## 第七節 Blauer Himmel（青空）

その戦いは、人間が見たらきつと奇妙だと思うに違いない。

エルフェたちが剣や弓で応戦するのは、まるで塗りつぶされたような真つ黒な闇。冬の森の白によく映えて、奇妙にうごめいている。そして実体があるようなような、それらには音がない。

もちろん、音が雪に吸われている、というわけでもない。まったくかれらには、音というものが存在していないかのようなのだ。足音も、その腕が風を切る音すらも。ぬらぬらと蠢くかれらの前で、聞こえるのはエルフェ側の声や武器や術の音だけだ。

「遅いぞガイゲッ！」

「すみません、今援護します！」

遅れて駆けつけたガイゲをよく通る声で怒鳴ったのは、片刃の穂をもつ細身の銀槍を携えた背の高い女性だ。人のような虫のような、奇妙な形をしたそれが斬りつけてくるのを柄で受け流し、金系の交じった茶の長髪をなびかせながら、その胴へ真つ直ぐに突きを食らわせる。

まるで当然とばかりに穂先は腹から背へと大穴を開けて突き出たが、まるで液体に突っ込んだかのように波打つと、黒い雫を数滴散らしただけでまた元にもどってしまった。

だが一瞬動きを止めたそのの、丁度額ともとれる位置に一本の矢が突き刺さった。

ぱりん、と薄氷の割れるような音がして黒の塊の動きは鈍り、ひとつ瞬く合間にどろりと溶け出して形を失っていった。完全に溶けてなくなったそれを確認すると、女はガイゲのほうを振り向く。矢を放った姿勢のままだったガイゲは弓を下ろし、そのそばに女性はつかつかと歩み寄る。それから槍の峰で彼の頭を一度殴った。

「あいつたあッ！」

「お前、次の休みなしな」

「……はい……」

ずれた帽子をなおす彼を横目で見やりながら、彼女はふん、と鼻をならす。

「素直でよろしい。ブランドとシュネイはどうしたかわかるか？」

「シュネイが姿を消したので……ブランドが探しに」

「ちッ。さっさと見つけてこんな愚弟めが」

女は忌々しげに舌打ちをすると、石突をざくりと地面に突き刺した。その背後にどす黒い炎のようなものが見えたような気がして、ガイゲは思わず肩を震わせる。

「まあいい、いないものは仕方ないからな。……ところでガイゲ、

喉の調子は大丈夫か？ シュネイの代わりに歌ってほしい」

「大丈夫です。いけます」

先ほど歌ったばかりではあるが、彼は力強くうなずいて見せた。その視線に女は口元を緩め、ぽん、と気遣うように軽く肩をたたく。

「喉が壊れるほどは歌うなよ。あいつのように殲滅しようなどと思うな。動きを止めるだけで十分だ」



気遣いの言葉を口にしてから、ビルケは一瞬考え込んだ。そしてもうひとつ、と注文を付け加える。

「それと、影どもの数の把握を頼む」

「わかりました……ですが」

ちらりと向こうの方の喧騒を見やる。この集落に影に効力のある歌を歌えるセングルは少ない。だが歌っている間、セングル自身は無防備なのだ。歌う間、誰かがその身を守らなければならなかった。

「私がお前の楯になろう。シュネイとおまえと赤毛馬鹿の組み合わせにはとても敵わんがな」

「敵わないだなんて、そんな。ビルケ隊長が守ってくださるなら心強いですよ」

「ふふ、そうか。私の代わりに、あとで奴らを思いっきり殴っておけよ？」

ビルケと呼ばれた彼女は、ガイゲに殴られる二人を想像したのか、心底楽しそうに口元をゆがめてから、すぐに顔を引き締めた。

「いくぞ、時間が惜しい」

「はい」

ビルケは槍を地面から引っっこ抜くと、風を切って駆け出した。ガイゲもそれに続く。

「くそつたれがッ」

「……これ、は、さすがに……キツイな……」

集落が影に襲われたのと時を同じくして、彼らも別の影の群れと相対していた。しかし、二人で応戦するにはあまりにも数が多すぎる。まるで待ち伏せていたかのように現れた影たちに、ブランドは歌うシュネイを守りきる余裕がない。シュネイも自身で攻撃を捌きながら、短く旋律を紡ぎ、小出しに相手の動きを鈍らせていく。

「きりがねえな畜生……！ ガイゲさえいりや一発なのに！」

「『天よりきたる白絹の笑み 黒の穢れを覆い隠せ』……つく！  
いないものは仕方ないだろ！」

右へ左へ自在に剣を薙ぐブランドと背中合わせのかたちで、自身も決して得意ではない長剣を振るう。唇から乗せられた音が影の足元の雪を盛り上がりさせて壁をつくり、その足を止める。

だが、「影」とは実態のない影であるがゆえにそう呼ばれるのだ。そんな足止めなどほんのわずかの時間しか効果はなく、すぐに壁から滲み出し、抜け出てきてしまう。そしてこれらは、その場の全てを殲滅しなければ決して追い払う事が出来ないという最大の難点があった。

「せめて戦えるやつがあと一人……あと一人、居れば歌う時間くらい稼げるのによ！」

ぬるりとした嫌な感触を手に伝えながら剣が相手の胸を真つ二つにし、ブランドは顔をしかめる。再生する間に脳天からその刃を振り下ろして額の核を割り抜くが、そいつが溶けきる前にまた別の影が襲い来る。シュネイがいるので背後から来る心配はないが、次か

ら次へと湧き出てくる影に辟易しながらまた剣を返した。

シュネイはシュネイで、歌いながらの戦い方をするので埒が明かない。旋律を安定させながら激しく体を動かすのは、予想以上に精神力が削られてしまふのだった。かといって歌うのをやめれば、彼の剣では影に太刀打ちなどできない。

「……あと一人、か……」

「できるのか？」

呟かれたそれを、ブランドはのがさず耳にとめる。白髪のエルフエは眉をひそめてぶつぶつと答えながら、長剣の刃を斜めに滑らせた。

「歌にかかるのがだいたい七メニト……片側を防ぐ程度の『傀儡』ならあるいは」

「どのくらいかかる」

「一メニト半から二メニト」

「……ちいつときつついな……」

眉をひそめ、提示された時間を守りきる自信はあまりないと示すブランド。間髪いれずに降ってきた鎌状の腕を弾き、ひるんだ隙に胴を思い切り蹴飛ばしてやる。

「無理か？」

「だれが無理なんて言ったか、よ！」

蹴り倒したそいつの急所を貫き、赤毛の男はにやりと笑った。

「ただ、ひとつ条件がある」

「なんだ？」

「俺に森の守護をくれ。じゃなきゃ途中で倒れそうだ」

「守護か、わかった。ちよつとまつてく……れなっ」

影の突き出してくる太い針状のそれを防ぎ、ギリギリと鏑迫り合  
いのような形になった。力は互角、気を抜けば押し負ける。金色の  
瞳で色のない相手をまっすぐに睨み、腕に力を込めていく。

すると、ふつ、と影の力が一瞬引いた。シュネイはその瞬間を逃  
さずに、短いフレーズを口にする。

『吹き抜ける風、恵みの大地、わが同胞に木々の護りを』

やや早口のそれを言い終えた瞬間、歌に氣をとられたシュネイは  
返ってきた影の力に負け、バランスを崩した。対する影はここぞと  
ばかりに大きく針状の腕を振り上げ、倒れ行く瞬間のその心臓に向  
けて突き出す。

やられる  
！

体勢を変えることの出来ない男は思わず目を閉じ、胸に突き刺さ  
る黒い針を想像した

が、それは現実にはならなかった。代わりにぱりん、と影の核の  
割れたなじみの音がして、シュネイの体は雪に優しく受け止められ  
る。

「あつぶねー……下手したら二人仲良く死んでたな、こりゃ」

聞き覚えのある男の声が真上から降ってきたので瞼を開けると、実体のない緑色の薄衣を纏ったブランドが、笑ってその手を差し伸べていた。遠慮なくその手をつかんで起き上がらせてもらい、見渡してみれば周囲の影どもは少し後退している。

……いや、正確には後退したのではない。近くにいた影は、全て核を割り抜かれたのだ。その証拠に、白いはずのあたりは黒い染みだらけである。が、それも瞬く間に透けて消えていった。

「ニメニトはかかるはずじゃなかったか、あれ」

「そんな間があるか。短縮できるものは出来る限り短くするさ。……しかしまあ、よくやるよ。歌が間に合っても、お前じゃなきゃやられてた」

森の守護を受けたブランドは、身体能力や感覚を研ぎ澄まされただけでなく、失った体力までも回復されたのか、見るからに生き生きとした顔をしていた。対してシュネイはややつれた顔をして、ブランドの肩を叩きながら率直な感想を述べる。

「……別におれが傀儡作らなくても、一人でいけるんじゃないか？」

「いや無理、気配がヤバイ。多分まだでかいのが隠れてやがるし。だから早く援護しろ」

「……了解」

軽口は終わりだとはかりに、ブランドはシュネイから数歩離れて再び剣を構える。今度は守りに徹するための構えだ。そう、無理に打って出る必要はない。だが空色の瞳はどんな敵も通すまいと、炯々としている。

「創造や破壊の歌は略せないから困ったもんだよな……さてと。『天の神、地の神、時の神、万物を司りし意志よ』！」

ちいさなばやきの後に高らかに宣言された、創造の初めの文句。それを合図とするかのように、ブランドの攻勢におののいていた影たちが一斉に動き出した。

シュネイはゆっくりと目を閉じ、足を肩幅に開いて落ち着けるように深呼吸をする。視界を自ら遮るなど、完全にブランドを信頼しきっているからこそ出来ることだ。

信頼にこたえるように、ブランドが動いた。白い地面を蹴立て、シュネイを中心として円を描くように飛び回り、的確に影たちの急所……額の核を攻撃していく。瞬く間に地面は真っ黒に染まったが、シュネイの足元は未だ純白のままだ。

「……光なき闇、闇なき光、暁と宵の間に眠れし意思と共にあれ……痛みを抱え、傷をつくりて創造と成した、神々の御業の如き……」

ブランドが正面で影を斬る隙に、その背後から別の影がシュネイの体を貫こうと忍び寄る。だが振り上げた蜘蛛のような多足を下ろす前に、その足が全て切り落とされた。

「なめんなよ？ 化け物」

にやりと笑う彼の顔は、さながら戦の鬼のようだ。剣を振るうことが楽しくて仕方がないようにさえ見える。

足を落とされひるんだ影の体を駆け上り、核に剣先を滑らせると、流れるように大きく宙へ躍り出る。下で大口を開けて待ち構える影には体をひねって刃を下にし、落ちる勢いのまま突き立てた。体重のかかった刃は一気に影の体を貫き通し、ブランドの体ごと核の部分を突き抜ける。

溶け出した黒の返り血を浴びながら、さらに闇と闇の間を疾走<sup>はし</sup>る赤。

「！」

その時だ。

シュネイの右手前方の木陰から、今までの影どもと比べると桁違いに大きな影が現れた。木々をなぎ倒すようにぬめり、と抜け出たそれは、足元の影たちを飲み込みながら真っ直ぐにシュネイに向けて進んでくる。

幸いにもその動きは鈍重で、まるで巨大なめくじのように見える。だがそれも段々と形を変えてゆき、やがて四足の奇妙な獣の姿となった。

「……………なん、だよ……………ありやあ……………」

気配を感じていたとはいえ、あまりにも大きなそれを目にして、ブランドは思わず一瞬、意識を奪われてしまう。

黒い巨獣は、獣が水で濡れたときに似た仕草で身震いすると、おのくエルフェに鼻面を向けて、にたりと嗤うように裂けた口をゆがませた。

『……………土に還らんとする獣たち、風に還らんとする同胞たちの魂よ。今一度わが声に応えて黄泉還れ』

その時、シュネイの歌が終わった。

同時にざわり、と彼の周りの空気が動きだし、それに呼応してコバルト色の影を伸ばしながら、雪の塊が渦を巻いて立ち上がったゆく。雪はまるで見えない手でこねられる粘土のように形を変え、やがて巨大な蛇の形となる。鎌首をもたげた氷の蛇はゆっくりと腹を

波打たせながら、シュネイを見下ろした。

そこでシュネイは、ようやく瞼を開く。

ちろちろと舌を出し入れしながら、つくり主の命令を待つて控える蛇と、突如現れたそれに挑むようにたたずむ黒い巨体を認識し、荒い息を懸命に整えながら次の言葉を吐き出した。

「我が声が生みし雪の彫像よ」

その台詞で氷の蛇は頭を少し下げ、獲物を捕らえるリズムを図る動きで左右に頭を揺らし始める。影の獣も、いつでも飛びかけられるよう体勢を低くした。互いに牽制しあうように存在しない目を光らせ、白蛇と黒獣が睨みあう形となる。

「この世にあらざるモノを滅せよ」

シュネイの声と共に、白と黒は互いを喰らい合わんと前へ飛び出した。

長引く戦いに、エルフェたちの疲労の色が濃くなってきた頃。急に影たちの動きが緩慢になった。ガイゲやほかのセングルたちが歌っているせいではなく、それに加えて更に鈍ったのだ。これは好機とばかりに、エルフェたちは反撃を開始する。

（……？ 何が起きた？）



ビルケは約束どおりガイゲの身辺を守りながら、黒い敵の鈍った動きに眉をひそめた。一本にまとめた長い髪が体について動き、よく晴れた空からの光に反射して輝く。

「！ ビルケ隊長！」

「なんだ?!」

「森のほうから歌が……」

戦いの音にまぎれて聞こえてきたかすかな音の連なりに、ガイゲはしばし歌うのをやめて耳を澄ました。影との戦いのたびに聞きなれた旋律だ、間違っても聞き違うなんてことはない。

「シユネイの声です！」

「近いのか？」

ビルケが槍を軽く回転させて攻撃を捌き、ひと段落したところで次の獲物を探しながら訊いてきた。

彼女はガイゲほど耳がよくない。というよりも、ガイゲやシユネイを含めたセングルたちの方が、鍛えられた特殊な耳を持っているのだが。

「僕の足で五メニトほどのところ、みたいです」

「曲は、いつものアレか？」

「ええ」

「なるほどな。どうりで影どもの動きが一段と鈍ったわけだ」

「向こうも襲われていたんですね…… どうしますか？」

ガイゲは弓に手をやりながら、ビルケを見た。今にも走って行きたそうな彼の様子に苦笑して、ビルケは再び槍の穂を新たに湧いた

影に向ける。

「行つてこい、ガイゲ。いつも通り、しっかりサポートしてやれよ！」

「！はい！」

にやりと笑ったビルケの言葉に、ぱつと表情を明るくして、ガイゲは一目散に森へと駆け出す。その道を塞ぐように立ちはだかろうとした影を、横から銀色の光が貫いた。

「貴様らの相手はこの私だ。来い」

不敵に笑うビルケ。ガイゲは彼女に軽く目礼だけして、再び駆け出す。

「……ちツ、やべえな……アレはでけえので手一杯だし……つつてもシュネイにやこれ以上……」

作り主の意志に従つてか、氷の蛇は巨大な黒獣と絡み合いながら、遠くへ遠くへと運んでいく。

ぶつぶつと呟きながら、ブランドは効力の切れ掛かった森の守護に精一杯頼つて、剣を振るい続けていた。完全な状態ではないそれが、徐々に疲れの溜まりはじめた体と共に、焦りに拍車をかける。しかしシュネイの歌が終わるまで、あと三メニトはかかるのだ。歌を中断させては全てが水泡に帰すし、何よりもこの一曲以上は、

シュネイの喉が限界であろう事は想像がついた。

（くそっ……ガイゲがいりゃあこんなの……）

この場にはいない男を思い浮かべて、振り切るように頭を横に振る。叶わない希望は、絶望を生むだけだ。そう思いなおして、ブランドはちらりとシュネイのほうに目をやった。

そして、彼が見たのは。

影の怪物の強靱な顎が、まさにその肩に吸い込まれようとする瞬間であった。

「シュネイツ、逃げろオーツッ！」

しかし、目を閉じて歌にだけ集中しているシュネイには、彼の言葉は届かない。一瞬でも気を抜いた自分を責めながら、ブランドは渾身の力で腰にさしていた短剣を投げつけた。が、どう考えても間に合いはしない。

「まったく、しょうがないな」

どこからか男の声がして、同時に矢を受けた影がのけぞる。ブランドの投げた短剣は黒い喉に突き刺さり、声もない悲鳴を上げたそれに追い討ちをかけるように、再び飛来した矢が額を撃ち抜いた。核を砕かれた影はあっけなく溶け出してシュネイの足元に崩れ、瞬く間に残骸は雪上にきえていった。

「　　っ?!」

「もう、僕がいないと駄目なんだからー。あの状態のシュネイに、

反応できるわけないでしょー」

「ガイゲ？！……助かった！」

木々の間からため息をつきながら顔を出したのは、まぎれもなく見知ったぼっちゃり顔。全速力で走ってきたのだろー、肩の上下が激しい。ブランドにとっては半ば孤独といってもよかった戦いに、光が差した。これならシュネイの歌が終わるまであと少し、踏ん張れる。

と、余所見をしていたブランドの背後に唐突に影が現れる。だが、彼はそれを振り向くと同時に斬り上げた剣で、難なく葬った。ガイゲが来たというそれだけで、別人のように体が軽くなってくる。

「この節だと……あと二メートル半つてとこかあ」

ガイゲはざつと辺りをみまわすと、手近な枝に素早く飛び乗る。それから矢筒から出した矢を三本同時につがえた。彼の矢は、シュネイが見回りに使っているものよりも幾分か、細く短い。

「さーてと。反撃開始ー」

狙うはブランドの背後を中心とした死角。独り言と共につがえた矢を放った。三本の矢はきれいな弧を描くと、わずかに時間差をつけながら一体の影に突き刺さる。そのうちの一本が、額の核を壊した。

よほど腕に自信があるのか、ガイゲは矢が当たったかどうかなどろくに見もしない。次々と流れるようにつがえ、狙い、放つ。正直なところ歌よりも、弓の方が得意なのではないかと思わせる正確さで、影たちの数を減らしていく。

「おー、さっすがガイゲ……負けてらんねー、なッ！」

一方援軍を得たブランドの方も、俄然キレのある戦いぶりに戻ってきた。背後を気にする必要がなくなったのだ。それが疲れを押さえ込み、影どもを完膚なきまでに斬り伏せるだけの力を蘇らせた。「いつも通り」の戦い方、それが心の余裕と冷静さを生む。

白に交わらんとする 黒は黒に還れ

闇より出でし 黄金王の眷属

古の定め輪より 意図せずはぐれし者どもよ

我が声を聞け 理に従え

世界よ 道をはずれし彼らを

大いなる慈悲に 包み赦したまえ

やがてシュネイの紡ぐ長歌の、最後の言葉がようやく放たれた。両腕をそろえて前に突き出すと、ぐん、と一瞬にして何か目に見えないものが彼の周りに集まる。

次に閉じていた瞼を開き、腕を大きく左右に広げた。同時に彼を中心として円状に、見えない力が一気に広がっていく。透明な力の波に飲み込まれた影は動きを止め、抵抗する間もなく青白い光の粒へと分解された。分解されたあとの光は、真っ直ぐ天へと昇っていく。

あの巨大な黒獣もわずかに抵抗したが、動きの鈍ったところで白蛇に首を噛み千切られ、その断面から光の粒となって消えていった。

「……ふっ」

しばらく腕を広げたまま影の様子を見ていたシュネイだが、それらが全て消え去ると、ようやく息をついて肩を下ろした。ブランドはどさりと剣を投げ出して、その場に大の字に横たわり、ガイゲは枝から飛び降りるとシュネイの元に駆け寄る。

「シュネー！」

「おあつ……えつ、あれ、ガイゲ?!」

泣きそうな顔で飛びつかれ、シュネイは目を見開いて友人の体を受け止める。

「大丈夫？ 怪我ない？ よかったあ、幽霊じゃなくてー」

「あ、ああ……。そっか、手伝ってくれたのか。ありがとうな」

まわりを見渡し、そこら中に矢が散乱しているのを見て礼をいう。ぼんぼん、とその背中を数度叩いてやってから、彼の体を引き剥がした。それから向かって左側に倒れている、赤髪の男に近よる。そばにしゃがみこみ、心配そうにその顔を覗き込んだ。

「大丈夫か？」

「おう、なんとか……でももう体中いてえや」

「すまないな」

「お前が謝ることじゃねえだろ。……しかし、非番なのに出番のときよりくたくただぜ、ったく」

毛皮の外套はあちこち破れ、帽子もマフラーも何処かに吹き飛んでいる。顔もかすり傷だらけではあったが、大きな怪我などはない。文句を言いながらも、赤髪の男は白い歯をのぞかせて笑ってみせた。

「そうか、よかった」

シュネイの髪がふいにきらめく雪のように光って、ブランドは目を細めた。その脇からにゅっ、と柔らかな茶色の癖毛が顔をだす。

「一人で立てる？ 立てないなら歌ってあげようか」

「おう、すまねえ。頼めるか」

「いいよー。どうせまた後でビルケ隊長に殴られると思うしー」

「げっ……マジかよ」

ブランドの引きつった顔を見て、ガイゲもシュネイも顔を見合わせて笑う。

と、笑ったあとにシュネイの顔がさつと青ざめた。

「そうだ、ここに影がいたって事は、村は……！」

「うん、襲われたけど大丈夫だよー。シュネイの歌、向こうにいた時に聞こえてたから、届いてるはず」

「そ……っか、なら」

ほっと胸を撫で下ろし、シュネイは今度こそ心から笑う。シュネイを安心させたガイゲも再びブランドのほうを向き、治癒の歌を歌おうと息を吸い込んだ。

「ふふ、さすがは噂のセングルね」

そこに聞こえたのは、聞き覚えのない女の声。

## 第八節 M a c h t k a m p f（権力争い）（前書き）

我らに徒なす、矮小なる者どもよ。自ら守られておきながら、  
なる姿か。

ああ、お前たちはこれ以上わしを傷つけて、一体何を成さんという  
のだ。

『ソンネントラーネ叙事詩』  
スピエゲル王の嘆きより



## 第八節 Machtkampf（権力争い）

身構えた三人の前に現れたのは、エルフェの姿をした少女だった。いくらか灰がかかった白い髪と褐色の肌をもち、空を映したような青い瞳をして、見た目はステルンよりもやや幼い印象を受ける。

それが、空中に浮いているのだ。鴉のように真っ黒な、それもエルフェが決して着ないであろう華美なドレスを纏い、赤い唇を三日月の形に吊り上げている。

「しゅ……シュネイ……ガイゲ……！」

「人間?!」

「ステルンちゃん?!」

ブランドとガイゲがほぼ同時に声をあげ、三人は滞空する少女を見上げる。

腕にはステルンの体が抱えられていた。ぶらんと宙吊りになるような形で小脇に抱えられたステルンは、黒い少女の腕の中で泣きそうなほど顔をゆがめている。

ふと、黙り込んだままのシュネイに視線を移したガイゲは、彼が目を見張ったまま立ち尽くしているのに気がついた。固まったままで凝視する先は、抱えられた茶髪の少女ではなく、褐色の肌の少女の方。

「……アー、レ……？」

やがてシュネイの口から飛び出したのは、ガイゲも何度が耳にしたことのある名前だった。風に溶けてしまいそうなほどか細い呟き

には、驚きと共に懐かしさが幾分か混じる。

「さてよ、アーレって確かお前の……」

つらそうに体を起こしながら、ブランドが何かを言いかける。すると白髪の男はゆっくりとうなずいた。

シュネイは信じられないといった顔で一度瞬きをし、ふたたび二人の少女を見る。つられてよくよく見てみれば、彼女たちの顔は互いによく似ていた。

「アーレ、ってかわいい名前ねえ。誰の名前？」

「……………」

「あら、意地悪なお兄さん。……もしかしたらこの体の名前？」

少女の何気ないつぶやきに、シュネイは一瞬、苦しげに眉をひそめた。するとそれはにたりと嫌な笑いを浮かべて、甲高く耳障りな声の大笑いをする。

「きゃはははははっ、面白いわね！ エルフエがかくまってた人間だし、すぐに食べてやろうと思ったけれど」

唇の形をゆがめたまま、高飛車に笑った「アーレ」はシュネイを見つめた。

「まさか死ぬ前の知り合いが近くにいた、なんてね。いいわ、ご馳走は後のお楽しみ……大事なものといただから、チャンスをあげましょう」

くすくすという声が妙に耳について離れない。

ガイゲは少女をにらみながら、ゆっくりと弓に手をかける。困惑

した顔で震えるシュネイに、視線はむこうに向けたままでささやくように声をかける。

「シュネイ、よく見て。あれは影だ、シュネイの知ってる誰かじゃない」

「……でもあれは」

「“魂核を正しく割れなかった”なら、ありうる話だろ。姿は似てても、中身はちがう」

「……わかってる……けど……」

煮え切らないシュネイの態度にため息をついて、ガイゲは弓をつがえずに目測を始めた。

眉をひそめ、友人の口から漏れた声を無視するように、今度は言葉を成さない歌を歌う。セングル同士にだけ通じるかすかな音の流れで、意志を伝えた。

「僕がこれからあの影を射る。そしたらシュネイはステルンちゃんを助けて、村まで逃げるんだ。いま一番動けるのは僕だから、ブランドは何とかする」  
「……………」

白髪の男は答えない。困惑するようにガイゲと空中の少女とを交互に見やる。

『いくよ?』

一応訊いてはみたが、黙りこむ彼の答えを待っている暇はなかった。ガイゲは吃と口を真一文字に結ぶと、例のごとく流れるように矢をつがえ、放つ。

しん、とその場が凍りついた。

矢はまっすぐに少女の額に刺さったが、影特有の核の割れた音がしなかった。

その代わり当たったはずの矢がばきん、とむなしい音を立てて折れ、雪の上に落ちた。黒の少女は口を三日月の形にゆがめたままで、まるで外見には不相応な表情をガイゲに向ける。少女の核を守る「殻」の思いがけない堅さに驚いたガイゲは、矢を放った姿勢のまま硬直した。雪上に膝についているブランドや、少女に抱えられたままのステルンも、同じく目を丸くした。

「馬鹿ねえ。エルフェの矢ごときで壊れるとも思ってた？」

ねっとりとした声で三人の男を見下す「アーレ」。その視線の先で歯噛みするガイゲとブランド。

シュネイだけは驚きとともにすこしだけ安堵したような、なんともいえない表情を浮かべていた。やはり自分の妹と同じ顔をしたものが死ぬところを見るのは、気が引けるのだらう。

「影なんかと一緒にしてるなら教えてあげる。私たちは『闇』、ガルド・シアの眷属でも上位の存在」

「……闇、だと？」

「そうよ。黄金王の手で直に魂を掬い上げられた、嘆きと恨みの声」「嘆きと……恨み……」

少女の言葉を繰り返すようにつぶやき、シュネイはようやく表情を変えた。まだ困惑の色は抜けないが、真っ直ぐに空中の姿を見つめるその目に、光が戻る。

「ガイゲ、弓を収めたほうがいい。今やりあっても勝ち目はなさそうだ」

もう一度矢をつがえようと構えるガイゲを片腕で制し、シュネイは諦めたように頭を振った。

「何でだよっ」

「お前だって影と戦った後だし、あれは疲れてる様子がない」  
「ふふ、賢明な判断ね」

褒められても嬉しくはないと、シュネイはアーレの形をしたモノに向けた視線を険しいものに変える。睨みつける青年を優越に浸るような表情で見下ろしながら、少女はにたにたと笑い続ける。

「さっき何か言いかけたな？ そんな人間の子供なんか攫って、何をするつもりだ」

「あら、何よその言い方。大事なものじゃなかったの？」

「一応は村の客人だが。……それがどうした？」

「ふうん……まあいいわ。もしこの娘、助けたいならお探しなさいな。宝探して所かしら。ほうっておけば、人間なんかすぐに壊れちゃうのは分かってるわよね？」

まるでおもちゃの人形を隠すの、とても言いたげなその台詞に、シュネイはぎり、と歯噛みする。いまここで戦う力のないことが、もどかしい。

「ちょっと、いい加減にしなさいよ！ 黙ってれば人を物みたいに言っちゃって、あんた何様のつもり？！」

抱えられたステルンが急に声をあげた。黙り込んでいたのが嘘のように、手足を幼子のようにばたつかせて暴れだす。「アーレ」は腕の中で暴れだした人間に目を丸くして、それからすぐ眉をひそめて不快そうに彼女をにらみつけた。

「うるさいわね……これだから人間は嫌なのよ。力もないくせにぎやあぎやあわめくし、一人じゃ臆病なくせに集団になると途端に強気になってみたり」

喋り続ける青い目が細められ、ふいに金色に煌くのをシュネイはみた。吐き出される言葉のひとつひとつが、まるで復讐に駆られていた頃の自分と似た感情であることに気付く。

「そついえばだまし討ちも得意なのよね？ 弱ったふりをして油断させていきなり傷つけたり、一人だと思わせておいて、火を放って混乱させたところに襲ってきたり？」

「人間がみんなそうだと思ったら大間違いよッ」

「じゃあ人間はだれもそんなことをしないとでも？ 事実そうやってあたしは人間に殺されたのよ。誰かの腕の中から急にもぎとられて、わけもわからないうちに殺されたわ」

「っ！ ……それ、は……」

言い返され、ステルンは顔を真っ赤にすると、唇を噛んで黙り込む。そんな彼女をみて、「アーレ」は鼻で笑った。それ以上何も言わないと分かると、つまらなそうに視線を三人の方へ戻す。

宙を漂う黒の少女が何を思い出してそう言っていたのか、シュネイにはすぐに検討がついた。

……やはり彼女は、妹のアーレなのだろう。本人は気づかずとも、その口が語る記憶が嫌でも確信させてくれる。

「……気が変わったわ。うるさいからやっぱり殺して血をすするのがいい」

「そうはいかんど、音無しの化け物」

「?!」

言い終わらぬうちに、細身の槍が背中から小さな胸を貫いた。アーレが驚く間もなく槍の柄がぐん、と横に振られ、ステルンを抱えた腕が下に向くような格好で、白い地面にその体が叩きつけられる。容赦なく少女を地面にひれ伏させたのは、銀槍を操る金糸交じりの長い髪。ペリドットの瞳を凍らせて、自分を見上げる青い目を静かに睨み返す。

「隊長?!」

「義姉さん?!」

「まったく、男のくせに情けないな貴様ら……それでも私の隊のメンバーか?」

ガイゲとブランドが同時に声をあげたところへ、ビルケはため息をついて首を振る。二人は心の中でそつと、それはあんたが化け物なんだと抗議したが、何かを察知したらしい彼女のひと睨みで身をすくめた。

「まあ、そういうなビルケ。この様子だと三人とも相当力を使ったようだ、仕方なかるう」

「ドンネル隊長……」

「! 影たちはどうしたの?!」

二人の「隊長」が現れたことで、アーレが驚きに声を張り上げる。ドンネルは地面に叩きつけられて気を失ったステルンに一瞥だけ

をくると、低く笑って重そうなポールアックスの刃をアーレの目の前に突き立てた。

「さっきの『歌』を聞いていなかったのかね。あれは我々の耳に音の届く範囲の影を『還す』ための長歌。お嬢さんこそ、エルフェをずいぶん甘く見ていたのだな」

「……還す？ 還すですって？ 輪廻から外れた影を？ そんなことが」

「できる。今のところ、ヤーレスツアイトではただ一人だけだな」

ビルケがちらりと見やった先にいるのは白髪青年。ぎちりと悔しげに歯を鳴らして、アーレは褐色の肌のセングルを睨む。

が、やがてその顔がふたたび笑みに変わると、少女は甲高い声で笑い出した。

「あは……あははははッ！ まさかそんな面白いエルフェがいるなんて、思ってもみなかったわ！ きやはははッ！」

「……っ！ こいつ？！」

狂ったように笑う彼女を押さえつけようとした、ビルケの槍がずぶりと地面に沈む。急いで引き抜こうとするが、粘ついた黒に捕らわれた槍はびくともしない。塗りつぶしたような黒いしみとなって地面に溶け込んでゆくアーレの体は、いつの間にかビルケの足をも飲み込んでいる。

「ビルケ！」

「……くそっ、抜けん！」

慌ててドンネルやガイゲがビルケの腕をつかんで引き抜くのを手伝うが、ブーツごと足までが取り込まれているようで、いくら引つ



張ったところで地面から抜けはしない。それどころか、逆に柔らかな雪にとられた足が滑り、ビルケは一気に膝までを飲み込まれた。

「きゃははははッ！ 黄金王さまにお教えしなくっちゃね！」

目を見開いて笑いながら、ずるずると影に溶けていく少女の姿は、奇妙にゆがんだ空想画のような気味の悪さを伴う。

必死に抵抗するビルケに黒い蔭のようなものが巻きつき、抗えぬほどの力で縛り上げていた。そしてその手を引いて取込ませまいとする男たちの腕から、あざ笑うように彼女の体を地の底に奪い去った。

「その人間の替わりにもらっていくわ。そのほうが必死になるでしょ？ ……じゃあね」

とぷん、と天から落とされた水滴が地に染みるように黒が消え、ざらついた声と無数の足跡だけがそこに残される。

……白の森に静けさが戻り、凍えた空気が張り詰めていた。

「ふむ……ビルケがのう」

影の襲撃がおさまってから一アルフズ半ほど後。ヤーレスツアイトの長・ミステルは、今回の影の襲撃の顛末を伝え聞いて眉をひそめる。広間には五人の長老格のエルフェたちが集まっていた。その

中央に、先ほどの騒動でビルケが連れ去られるのを見ていたエルフエ…… シュネイたち四人が控えている。

「……どこまで本当のことやら」

「と、いうと？」

「彼らは人間に加担しておるのでしょうか？ 人間が災いを招いたのだとすれば納得がいく」

一人の言葉に、他の四人の長老が各々うなずいた。

シュネイは思わず声を出しそうになったが、ドンネルの静かな、しかし鋭い視線にぐっと声を飲み込んだ。今、この場での彼らの発言は許されていない。

「まあ、そう言いたくなる気持ちもわかるがの、ヒンメル。しかしドンネルの人間嫌いはお主が一番よく知っておろう？」

「お言葉ですがミステル様」

深い皺の刻まれた顔をかすかにゆがめ、ヒンメルと呼ばれた男は一度言葉を区切る。

「人間と共にいたというだけで、影を招いたという疑いは深まります。それはどんなによく知っていようと……たとえ我が息子であっても変わりはない」

顔を伏せたドンネルにちらりと視線をよこし、ヒンメルは頭を横に振る。その彼に賛同するように、隣にいた初老の女がうなずいた。

「そもそも影とは、我らエルフェの影。人間に魂核をうばわれ、人間の気配に強く惹かれて生き物を無差別に襲う抜け殻だという事は、それこそミステル様が良く知っておられるでしょう？」

「ふうむ……」

ミステルは長老たちの言葉に少し考え込み、瞼を軽く伏せた。

「……あの人間を殺してしまえば、何も問題はないのでは？」

静寂に突如として刻まれたヒンメル提案に、シュネイは思わず顔を上げた。金色の目を見開き、長老衆のうなずきにただただ絶句する。

「それもひとつの手ではあるがの」

人間など全て殺してしまうべきだという、常の彼の意見を知っているからこそ、それをいさめるようにミステルは重い口を開いた。

「あの娘の心に邪心はないのだよ。心根が影を呼ぶのだと何度も言っておろう？ この期に及んで、お前はまだわしの力を信じぬというのか」

「いいえ。ですが我らには確かめようがないのも事実。危険性がある以上、排除するのは当然のことでしょう」

ミステルの翠玉の視線にヒンメルは一瞬ひるんだが、それでもやや口ごもるようにして反抗した。

「おぬしとやり合っておると埒があかな」

軽い嘆息と共に、小さな老女は本音を吐き出した。それからシュネイたちのほうへ顔を向ける。

「どうじゃ、伝え聞きではなく、お前たちの口から直接話を聞いた

いのじゃが」

「ミステル様?!」

「ぬしらは黙っておれ。公正な判断をするためには必要なことじゃろう?」

静かに燃える緑を向けられ、ざわついた長老衆はいちどきに黙り込む。

「さて、四人とも顔をあげい。先ほどこやつらはああ言ったがの。お前たちの中でそれが偽りだと思ふこと、もしくは伝え漏れや意見があるならば申してみんか?」

ミステルの言葉に従い、四人は戸惑うように顔を上げた。そのうちの若い三人は目線だけを交わして、何を言っているのか迷っているようだ。

「恐れながら申し上げます」

一番初めに口を開いたのはやはりドンネルだった。きれいに整えられたひげのある顔を長老衆にむけ、一度深く礼を取ってから話し始める。

「我々は人間に加担したわけではありません。無駄な報復を避けるため、あの人間を傷つけてはならぬというミステルさまの命に従ったまでのこと。ビルケが連れて行かれてしまったのは、彼女が捕らえた『闇』とやらの能力に絡め取られてのことです。結果的には人間が残ってしまいましたが、それは単なる偶然」

ですから、と彼は言葉を続ける。

「また捕らえられることのないよう、あの人間を閉じ込めておけばいいのでは？」

人間嫌いのドンネルらしい言葉だ。ミステルは小さく片眉をあげただけで、ほとんど微動だにせず、それを聞いている。ドンネルの発言を聞いて、今度はガイゲが反論した。

「恐れながら僕にも意見させてください」

ミステルがうなずいて促すと、ガイゲも礼を取った。

「襲撃が起きたとき、人間……ステルンは僕が一時的に監視しておりました。あの時、何か不審なことをする様子はなかった……だから彼女に影を呼ぶ暇はない。確かに僕が家を出るとき、彼女を家の中に残していきました。ですが、あの周辺に影の目に映らなくなる歌仕掛けをしているのは、長老衆もご存知とは思いますが」

「加担しておればそんな言い訳は通用せん。目を離せば同じであるうが。それに監視を言いつかつたのはシュネイなのだろう？ なぜお前が監視しておったというのかね？」

必死に説明するガイゲを、ヒンメルが耳ざとくとがめた。言いよどむガイゲ。沈黙に包まれる詮議の場。

だが、冷え込んだその空気を破ったのは一つの告白だった。

「おれが、監視を一時放棄したのです。俺が放置してしまったステルンをたまたま見つけて保護したのが、ガイゲとブランド。そこでブランドは俺を呼びに、ガイゲは監視に残ったと聞きました。彼が監視をしていたのはそのためです。……それから先は、先ほどご報告申し上げたとおり」

シュネイが頭を下げて言い終えると、彼を見ていたドンネルがふと思い出したように付け加えた。

「そういえば、ビルケをさらった『闇』とやら……あの人間とそっくりの顔をしておりましたな。ところが奴め白髪の褐色肌……ここに控えるシュネイと、似たような色をしておりましたが」

「！ それ、は……！」

思いがけない発言に、シュネイは思わず声をあげて呻いた。長老衆が再びざわつき、白髪の彼をにらむ。シュネイは助けを求めるように最長老のミステルを見やるが、彼女は諦めるとでも言うように首を横に振った。

「そうじゃのう。シュネイ、わしは話さずとも分かるが、隠し立てせず皆に話さない」

ぐ、と息をのむ。ためらうように瞳が宙をさまよい、それから観念したのか、彼はうなだれて話し出した。

「……ドンネル隊長の言う『闇』は、実の妹　アーレの『影』……だと思われます」

## 第九節 P e n d e l u h r（振り子時計）（前書き）

人は誰しも、一度は時計を止めたがるものだ。

しかし時に振り回されことなく生きるのは、空を捕らえるよりも難しい。

『レイゲン博士と雨の竜』  
樹竜ノートウソクの台詞より

## 第九節 Pendeluh (振り子時計)

今はなき、ヴィンデ族の移動集落。それは古き神々の遣した息吹がそこら中に息づき、歌い手たちが一族のほとんどもを占める、外の世界からは一線を隔てたところだ。

そこが、かつてシュネイが生まれ育った、彼のあるべき場所であった。

「おい、産まれたぞ、オツエアン！ 男の子だー！」

「本当か、ライリク?!」

皮で作った眼帯を左目にかぶせ、不安そうな表情で何かを歌いながら小さなカヌーを漕いでいた若い男は、岸からの声に顔を輝かせた。急いで船を岸につけ、知らせに来た友人と共に自分のテントへ駆けていく。

「ミルテ、ああ、良くやってくれた……！ 俺たちの……おお、おお、すごい、元気に泣きやがるな」

嬉しそうに目を細め、オツエアンは産婆の腕の中で泣く子供の頬をつつく。すると赤ん坊はますます大声を上げて泣き叫んだ。

「あら、オツエアンったら……昨日からそわそわして泣きそうだったくせに、もう笑ってる」

「そんなのどうだっていいだろ？ お前が無事で、子供も無事。こんなに嬉しい事はない！」

オツエアンは疲れきった笑顔の妻を抱きしめて頬に口付け、べー



ジユの髪を優しく撫でる。心から幸福そうな夫婦を、周りを取り囲む褐色肌のエルフェたちも笑顔で見守った。

グインデに生まれるエルフェたちは、みな一様に褐色の肌と色素の薄い髪色を持っていた。それは太古の風の神の血を継ぐからだといわれている。オツエアンとミルテの間に生まれた子も例に漏れず、真っ白な髪と褐色の肌を持っていた。

「ふうむ……。 “シュネイ” だな。冷たき風の巡る山の、その頂を彩る雪の名だ。……新たな仲間、祝福があらんことを」

長に与えられた名は、集落の中でも珍しいその髪色にちなんだ物。金の目を不思議そうに長に向けながら、赤ん坊は父の腕に抱かれて己の名を聞いた。

古くからの習わしに従って歌い、踊り、獲物を狩り、木の実を拾いながら、神々と精霊たちに祈りをささげ。そうして風の示すままに、集落を移動させて暮らしていたグインデ族。しかし年々生まれる子の数は減り、また昔ながらの生活を捨てて定住するものも後を断たない中で、無事に子供が産まれることはそれだけで喜びだった。風神グインドの伝承にそっくりな姿をもった子供の誕生に、その夜は集落を挙げての大宴会となった。

シュネイは朗らかで強い父と、穏やかで優しい母のもとで、すくすくと育った。彼が二十五になる頃には、空色の瞳を持った妹も生まれた。四人のちいさな家族は幸せだった。

だがシュネイが六十六歳になった年、そんなさやかに笑い合える幸せは、人間の手によって焼け落ちた。……妖精狩りだった。

その頃のシュネイはまだ何の力も持たない子供で、両親はおるか

小さな妹ですら、守る事はできなかったのだ。そればかりかエルフェの亡骸に当たる「魂核」さえ、そのほとんどを人間に奪われた。

ヴィンデの一族は男も女も、それぞれに力の差はあれど、皆が歌い手だった。受け継がれてきた旋律は他のエルフェのどんな歌よりも深く、また世界に及ぼす力も強かった。

しかし、彼らが歌うのはあくまで祈りのためであり、神話を語り伝えるためだ。

武器は食料を得るための道具であり、歌は祈りを捧げる方法でしかなかった彼らには、それらを他のエルフェのように、身を守ることに使うという概念は全くなかったのだ。というよりも、人の目から隠れて移動する集落にはその力で身を守る必要など、ほとんどなかったのだろう。

だから、突然襲ってきた人間どもを相手に、なす術などないに等しかった。

もとより人間とはエルフェの兄弟であると、古来より神話に教えられて育ってきた者たちだ。なぜ攻撃されるのか、そしてなぜ彼らが魂核を奪っていくのかなど、理解できなかったに違いない。その滅びはあまりにあっけなく、そしてあとかたもなかった。

「…………お父さん…………お母さん…………返事してよ…………なあ、アーレ…………！」

何もかもが奪われ、燃え盛るテントの間で。まだほんの少年だったシュネイには、魂核をうばわれて抜け殻となった家族の体が風に溶けていくのを、ただただ見守っているしかできなかった。

ぼろぼろになった布と木々の間に吹く、悲しいまでにやさしい風

の中で。

少年は、人間を、心より憎悪した。

「……もちろん、妹はもはや生きてなどおりません。奪われた魂核は、恐らく人間の手で砕かれたでしょう。ですから妹が影になっていたところで、それはエルフェならば当たりまえのことです。ましてや、我々はヴィンデの一族。その魂がより強い闇に惹かれたからとて、おれにとってはなんら不思議なことはありません」

今まで、集落の誰にも話してはいなかった過去。ガイゲやブランドはおろか、ミステルにさえ頑なに口を閉ざしていた。

淡々とした口調で語られたそれに、詮議の場はしんと静まり返る。生きたまま凍りついたかのように微動だにしない人々にむけて、シユネイはふと、場違いなほほえみをみせた。

「見回りで人間を助けたとき、妹にそっくりだったのには驚かされました」

けれど、と青年は言葉を継ぐ。

「命を助けたのは、それが理由ではありません。……いえ、個人的な感情が全くなかったとは言わない。ですが、おれがステルンを救ったのは……森が彼女を受け入れたからです。信じられないなら森の木々に聞いてみてください。少なくともそれは、彼女が影を呼ばないという証拠にはなる」

そこまでを言い切って、シュネイは口を閉じた。とたん、長老衆がかすかにざわめく。そのなかで、やはりヒンメルが代表して声をあげ、シュネイを責めたてようと言葉を吐いた。

「では、なにがあれだけの影を呼んだ？ 人間以外に何が  
「おれでしようね」

しかし青年は、凜とした声でヒンメルの言葉をさえぎる。放たれた一言に、皆が耳を疑った。

「今、なんと？」

「影を呼んだのはおれです、と。そう言いました。影を呼んだのはステルンではない。となるとこの村で影に縁があるのはおれだけでしょう？ 思い返せばあの影、エルフェを襲うのを面白がっていました。少なくとも今までの影のように、意志なく襲っているわけはなかった」

はつきりとよどみなく答えるシュネイの言葉を拾い、ミステルが口を開く。

「ふむ、なるほどな。もし今回の影どもを指揮していた『闇』とやらが、おまえの妹の魂が堕ちた姿なのじゃとしたら……血縁のあるおまえに惹かれた可能性は十分にある、ということじゃの」  
「ええ。ですから」

と、そこで一度言葉を途切れさせる。覚悟を決めるように息を吸い込み、そうして放った一言は。

「おれがあのお影から、ビルケ隊長を連れ戻します」

しん、と場が静まり返った。

同時に長老衆とドンネルが、シュネイに嫌疑の目を向ける。ミステルと友人二人は、はっと顔を上げて彼を見つめた。言葉を交わさずとも、シュネイには自分に集まった視線の意味するところがわかる。

なぜ、そんなにも簡単に言い放てるのか。

姿を借りただけの化け物かもしれぬが、エルフェの輪廻の法則を考えれば当然、その本人である可能性のほうが高いのだ。それにビルケを救い出すという事は恐らく、さらった相手を打ち倒さねばならない。

もとの家族を殺す覚悟を問われるのは、分かっていた。シュネイ自身、アーレの姿を前に戦えるのか……未だ迷いは晴れ切っていない。しかしこの場合はそうでもいわなければ、関係のないステルンへの疑いを少しでも晴らす事はできないのだ。

しばし、長老衆との睨み合いが続いた。しかしそれでも揺るがないシュネイの目に、ミステルのため息が部屋に響く。

結局ミステルが下した結論で、詮議はシュネイの望んだとおりの結末になった。今回の騒動の、全ての罪はシュネイにあり。よってその責任を負うがよい、と。

「それで？ 責任つたってどうするつもりなのさ、シュネイ？」

ドンネルと別れ、いつも通りの三人組でぶらぶらと当てもなく村の中を歩く。

「……とりあえず、アーレの居場所を探るしかないだろうな。どこにいるのかも分からないし」

ステルンは未だ、ミステルの配下の監視下で軟禁されていた。彼女の手の中ならば、無闇に殺されることもないだろう。あの場ではああ言い放ったものの、実際には何の計画もなかった。本当はあの闇と戦うことにもまだ迷いがある。

「まあ、そうだよー。……なんだか大変なことになっちゃったな」  
ガイゲののんびりとした口調に、後からついてきていたブランドがぴたりと足をとめた。突然止まった彼を、二人も立ち止まって振り返る。

「……………」  
「どうした、ブランド？」

やや下をむいて、握った拳をかすかに震わせている。だが、なぜブランドが怒っているのか、シュネイには分からなかった。ガイゲはわずかに顔を曇らせて、向かい合う二人の顔を見比べている。

「お前、人間をかばったろ」  
「……………」

静かな怒気をはらんだその問いに、シュネイは答えない。

「なんでだ？ 同じエルフェの義姉さんを助けるってのは分かる。けどあの闇ってやつは、初めっからあの人間を攫いに行っただろうが。人間なんかのために、なんでお前が犠牲にならなけりやらない？」

意外にもそれは、ステルンをかばったこと自体よりも、むしろシュネイの身を案じての言葉。だが、シュネイはますます黙り込む。

「妹に似てるからか？ 本物の妹よりも、偽物の人間の方が大事なのか」

「……ブランド」

「それとも贖罪か。あのくそくだらねえ人間どもに家族殺されておいて、それでも守るってのか？！」

「ブランドッ！！」

突然の大声に一瞬びくり、と体を震わせるブランド。しかし、ひたりと見つめてくる視線には、断固として引かない。

「……あまり、怒らせるな」

「はっ。馬鹿野郎、そりゃこっちの台詞だろうが」

「消……消されたいのか？」

怒りをこめてというよりは、とても無感情に彼は言う。まるで色のない雪のように、表情が冷たく消えた。金色の瞳だけが音もなく燃えている。

しばし睨み合いが続いた。

そして。

シュネイの、すう、と息を吸い込む仕草。

「シュネイ、ダメだっ！」

「ッ」

気付いたガイゲが、あわててその口に手を突っ込んだ。瞬間、噛みあわせられようとした歯に、皮膚を食い破られる。ガイゲは痛みを眉をしかめたが、この際仕方がない。

シュネイが感情のままに歌えば、その言葉は現実になるのだ。「消す」という言葉は、魂ごと全てを消し去ってやるという意味だろう。生まれ変わる事も、影になることさえもできない。待つのはただ、奈落の無。

「あ……？」

わずかに口に広がった血の味に、我にかえる。それを見て、ガイゲは安堵の息と共に突っ込んでいた手を引いた。はつきりと残る犬歯の痕が痛々しい。動脈が傷ついたのか、鮮やかな赤がその手からはたばたと滴った。

「そこまで堕ちたかよ」

それは失望と共に吐かれた。青い瞳はもはや、シュネイを見ていなかった。

「……………」

「……………」

無言でブランドは、二人の側を去っていく。シュネイもまた、無言でうつむいたまま、立ち尽くしていた。

まるで吹雪が荒れ狂う直前のように。ただ、冬の風だけが彼らの間を吹き抜けていった。

「シュネイ、大丈夫？」

「……ああ……いや、あの。それよりガイゲ、その、手……」



ブランドの姿が見えなくなってしまうと、長い無言が気ま  
ずくなつてガイゲが話しかける。

気を遣わせてしまったことに後悔を覚えているのか、シュネイは  
噛んでしまった手を示して応じた。ところがガイゲの方は微塵も気  
にせず、につこりと屈託のない笑みを見せる。

「大丈夫だよー、このくらい」

「ごめん……」

なおも頭を下げる彼に、ガイゲはゆっくりと首を横に振る。

「大丈夫だってばー。このくらいなら、薬つけて歌えば治るでしょ」

「……外見は治っても、ガイゲの歌じゃすぐに中までは治せないだ  
ろ」

いったいどんな顎の力をしているのか。吐き出されかけた音の激  
しさを示すように、ガイゲの指の付け根の辺りが奇妙な方向に曲が  
っている。食い破られた傷口から血があふれ、どうみても薬で治る  
などと軽く言えるような怪我ではない。

シュネイは道の脇に生えている樹の低い梢から、柔らかな雪をと  
つてきてガイゲの手の甲に当てた。綺麗な雪で傷口の血をすすいで  
みると、痛々しく破れた肉が見える。自分のしでかしたことに眉を  
ひそめながら、シュネイは軽く息を吸い込んだ。

『空よ、森よ、大地よ。あなた方の再生の力を、どうかこの小さき  
我らにお貸しく下さい』

そして先ほどとは全く違う、やさしい音をその口で奏でる。する  
とその声に応じて、ガイゲの傷口の周りにふわりと風が舞った。同

時に当てていた雪がするりとほどけて水となり、傷口を覆う。

「これならおそらく、一日待たずに治るはずだ」

「さっすがシュネイ。ありがとう」

「いや……その、当たり前のこと、だから」

礼を言われ、シュネイは目をそらして頭を掻く。

「……それで？ 探しに行くって、あてはあるの？」

「正直にいわばないに等しい。とりあえずヤドリギの助けを借りに  
いこうと思うんだ。ただ、エルフェだけのために力を貸してくれる  
かどうかは分からないけど」

「ヤドリギは気まぐれだもんねー。下手に力が強い分、そう簡単に  
折れてくれないし」

ふう、とガイゲが軽くため息をついた横で、シュネイが険しい顔  
のまま腕組みをして呟いた。

「或いは……アーレに力を貸している可能性もある。あいつは、  
“歌える”から」

「歌え……る？」

どういうこと？ と疑念の目をむければ、シュネイも難しそうに  
ひとつ唸って答える。どうやっていいのかよく分からないという顔  
だ。

「本当は普通の影でも、歌ってるんだ。まともな音にも言葉にもな  
らない歌で、何か泣き叫んでる。だけどアーレは言葉と音を持つて  
る。つまり、おれ達シングルと全く同じように歌える」

「えつと……いまいちよく分からない、んだけど？」

いままでエルフェの無念の姿である、としか認識していなかった影が、自分たちと同じく「歌う」。そんなことを突然きかされて、すんなりと納得できる方がおかしい。

顔をしかめて見上げるガイゲに、シュネイは真っ白な髪に手をあてながら、すこし困ったような顔をして口を開いた。

「おれもいまいちどう説明していいのやら。みんなみたいに普通のエルフェには、全然聞こえてないみたいだったし……影には音なんかない、ってみんな言うけど。いつも影が来ると、おれにはうるさいくらいで」

彼の口から出る言葉を半ば呆然とした頭で聴きながら、ガイゲはゆっくりと首を横に振る。

「そんなの、信じられないよ。いくらシュネイがヴィンデの生き残りだからって、そんなことまで」

「……だろうな。だから黙ってたんだ。自分の感じてることを相手に伝えるのは、いくら歌の力を使っても難しいだろうし。この感覚を伝えるには、ミステル様みたいに相手の心を感じ取るくらいじゃないと」

一瞬、淋しげに眉をひそめるシュネイ。だが、その表情は次のまばたきとともに消え去った。握った自分の拳をみつめ、かるく歯噛みをする。

「でも今はそんなこと言ってる場合じゃないだろう。アーレはもしかすると、生きてた頃の力そのままに歌える……自然の力だけじゃ

ない。下手をすれば人の気持ちだって操れてしまうんだ」

「え……？」

何を聞き違えたかと思い、思わず聞き返す。そして徐々にシユネイの言葉がしめす可能性に気付き、愕然とした。

「それって……つまり……」

「そうだ。ビルケ隊長が“味方のままとは限らない”」

「ちょ……」

思わず叫ぼうとして、何を言っているのか分からなくなり、言葉を詰まらせる。何度か浅く呼吸を繰り返してから、ようやく言葉を吐き出せた。

「ちょっと待つてよ……そんなのアリなの?!」

「ナシなら楽なんだがな。実際におれが出来るんだから、あいつにも出来る可能性はある」

軽いため息と一緒にさらりと暴露される、ガイゲのまだ知らない彼の力。いままで無条件に信頼していたはずの友人が、急に恐ろしく思えてきた。

「ずっと昔の話だ。……今はもう、そんなことは絶対しない。何よりおれ自身が嫌だから」

そんなガイゲの思っていることが何となく分かったのか、白髪の青年は困ったような笑みを向ける。

だがそれでも、エルフェの中では珍しいほど感情の不安定なシユネイのことだ。いつ何時、持っている力が凶刃に変わるかは知れない。

ガイゲは無意識に一步、後ずさるように距離を広げた。するとシユネイはまた淋しげに笑って、くるりと背を向ける。

「ステルンのところに行ってくる。……つき合わせて悪かった」

言い残すと、ガイゲが止める間もなく足早に立ち去った。

影との戦いで真新しい雪の上に残された、無数の足跡にまぎれて、二人の足跡はもはや追えはしない。

空はただ青く、高く。

ひとりその場に残された青年を、黙って見下ろしている。

第十節      Dunkelheit      (闇) (前書き)

見よ、愚か者の人間どもが獣の宴に供されるのを。  
忌むべき闇の宴に我らは踊り狂い、血をすする。

妖精を捕らえようなどという邪な輩の、結末をその目に、体に、焼き付けるのだ。

「ブルティネ・トランネン物語」

十五章「供宴」より

## 第十節 Dunkelheit (闇)

「あれ、シュネイ？……どうしたの」

朱の染料で染められた布の入り口をくぐってきたのは、見覚えのある青年だった。目を軽く伏せ、ため息などつきながらステルンの目の前に現れる。

「……いや、なんでもない」

「何でもないならなんでそんな顔してんのよ」

「まあ、ちよつと、な」

何が“ちよつと”なのかと思いつながらも、深く詮索はせずにステルンは黙り込む。

「で、あたしに何か用？　なんだかよく分からないうちに、こんなところに閉じ込められちゃったんだけど」

やや不満交じりに両手を広げて、人が住むには狭いテントを示して見せると、シュネイは何かおかしかったのかくすくすと笑いながら答える。

「いや、特に用という用はない。元気かなと思って」  
「元気かなって何よ」

つい先ほど別れたばかりなのに変なことを言う、とステルンは少し頬を膨らませて見せる。

するとシュネイは少し首をかしげるようにして、ふ、と何かもの

悲しげな笑みを浮かべ、ステルンの頭を軽く撫でた。驚いて固まっていたステルンに気付く、青年は手を離す。

「ああ、ごめん、つい」

「……………」

シュネイに撫でられた頭に無意識に手をやって、しばし呆然としていた彼女は、やがて少しくすぐったそうな笑みを浮かべた。

「なんか、兄さんが帰ってきたみたい」

「……………兄さん、か」

ステルンの言葉を呟くように繰り返すと、シュネイは力が抜けたようにその場に腰を下ろす。座り込んだシュネイを見下ろすと、自分だけ立っているのも馬鹿らしく思えて、ステルンもそのそばに座り込んだ。

「……………軟禁されてる身じゃ、出せるお茶もないけど」

「いや……………別に茶なら、帰ればいくらでもあるし」

「あははっ、そりゃそうよねえ」

軟禁されていると口ではいいながらも、なにか場違いな会話だと感じながら、茶髪の少女は伏せられた金色の瞳を気にして、あえてその理由には触れないように話題を避ける。

小さなストーブにかけられたヤカンが、ことごとく音を立てて揺れながら一心不乱に蒸気を吐き出していた。

なんとなく熱くなってきた頬にひんやりとした手をあてながら、こんな沈黙の中で何をしていいのかも分からず、かといってエルフェの使うストーブの温度調節の仕方もしらない少女は、ただじっとエルフェの青年の挙動を見守っている。



「……そういえばさ」  
「うん？」

ようやくと発せられたシュネイの言葉に、やや身を乗り出すようにしてステルンは耳を傾ける。

「ステルンの兄さんって、どんな人だったんだ？」  
「あたしの兄さん？」

思いがけない質問に、わずかに戸惑う。だが少女は、懐かしさにすこしの間瞼をおろすと、幼いころを思い出しながらその質問に答える。

「そうね。あの時ミステル様に言ったとおり、エルフェの嫌う“妖精狩り”よ。でも、あたしにとってはすごく優しくて……村の子供たちにいじめられた時は、いつも慰めてくれた」

「……いじめられてた？ ステルンが？」  
「何よう、その意外そうな顔」

妖精狩り、の言葉に一瞬眉をひそめた後、続いた言葉にきょとんとしてステルンを見つめてくるシュネイ。彼の表情に、少女はむう、と少し頬をふくらませた。

「あたし、小さい頃はいじめられっ子だったのよ。別に性格が暗かったとか、そういうわけじゃないんだけど……母さんと似て、生まれつき体が弱かったの。村の子と一緒に雪の中で走り回るなんて出来なかったし、それで仲間はずれにされるのも怖くて、いつも家の中で本ばかり読んでた」

「へえ……数日前に会ったおれから見ると、とてもそんな風には見

えないけどな」

正直な感想を悪びれもせず述べてくる青年に、ステルンは眉尻を下げながら笑う。

「でも兄さんとあたし、ちょっと年が離れてて。だから兄さんも、いつもは父さんの仕事に付いて行つて、あたしがいじめられるところにはほとんど居なかったのよね。一ヶ月家を空ける、なんて事もしょっちゅうだった」

シュネイは黙ったまま、ステルンの話に耳を傾けている。なんとなく何かを思い出しているようにも、ステルンには見えた。

「兄さんが帰つてくるとね、お帰りなさい、ってドアのところで出迎えたあたしの頭を、さつきシュネイがしたみたいに……ただいまって言いながらいつも撫でてくれてたの」

また無意識に頭に手をやって、ステルンはわずかに目を細める。

「なるほどな。だからさつき、『兄さんが帰ってきたみたい』だつて言つたのか」

「そうそう。それに多分、兄さんが生きてたら、シュネイと同じくらいだったと思うし」

「へえ？」

テントに入ってきたときよりは幾分か明るい顔をして、シュネイはくすくすと笑った。

「奇遇だな。おれの妹も、生きていたらちょうどステルンくらいの年だったよ。……もちろん見た目は、だけどな」

見た目は、のところに反応し、ステルンはやや憤慨して言い返す。

「そりゃそうよ。ほんとに同じくらいの歳だったら、兄さんじゃなくておじいちゃんだわ」

「あのさ……わりと傷つくから、その、おじいちゃんってのやめてくれ」

「そう?」

そんなの気にするようには見えないけど、と何か腑に落ちない顔でステルンは呟いたが、シュネイには聞こえたのかどうなのか。シュネイは困ったように笑いながら、そうだよ、とうなずいた。

と、不意にシュネイの顔が強ばる。何か遠くを見るように目を細めて、彼はゆっくりと首を振った。

「どうしたの?」

「……いや、なんでもない」

ステルンには聞こえないものでも聞いていたのだろうか。

何しろ相手は「妖精」だ。どんな力を持っていたとしてもおかしくはない。だからステルンも、首をかしげながらもそれ以上は聞かなかった。

「いきなり訪ねてきて悪かったな」

立ち上がろうとするシュネイに、ステルンは首を横に振る。

「いいのよ、どうせ何もする事はないし。……人探しに来たっていうのに、これじゃ何のためにこの村にいるのか分からないわ」

「……そうだな」

苦笑したステルンを見下ろす視線が、かすかにそれたような気がした。何を言うでもなく、ややぼんやりとした表情で静かにステルンに背をむけるが、彼が歩き出そうとする気配はない。

「？ 今日は何んだか変ね、シュネイ」

ぴくり、と肩を動かし。シュネイはくるりと振り向いた。

あまりにも唐突に振り向いたのでステルンは一瞬身構えるが、彼女に目をあわせることもなく、青年は無表情に口を開く。

「…… たった数日で、変かどうかなんてわからないだろ。エルフェが人間に悪意なく接する方が、変だとは思わないのか？」

先ほどまで笑いながら喋っていた人物と、同一人物だとは思えない表情だった。かけらほどの感情も読み取れないそれに、ステルンはわずかに戸惑いながらも答える。

「……初めは変だと思ってたわよ。でも少なくとも一緒にいる間、シュネイのあたしに対しての悪意は感じなかったし。それにエルフエは、所属している集落の長の命令には逆らえない」

「……………」

「違うの？」

聞き返す少女に、沈黙する男。

ちいさなテントの中で、かたこと音を立てている小さなヤカン。なんとも異様で居心地のわるい空気がただよう。

だがそんな奇妙な静けさを壊したのは、意外にも男の方だった。口の端をゆがめ、眉尻を下げて、ぷ、とこらえきれなくなっただように吹きだす。

「あははっ、よく観察されてるなあ。そのとおり、おれはミステル様には逆らえないし、ステルンに対する悪意も……今のところ、ない」

今のところ、だけ音量をわずかに下げている、シュネイは軽く肩を竦める。

「だてにエルフェの集落をいくつも旅してないわよ」  
「なるほど？」

馬鹿にするなどふんぞりかえった少女に対して、シュネイはさもおかしそうにくすくすと笑った。

「……『気をつける』、ね……」

「え？」

「なんでもないよ。……ああ、そうそう。軟禁中は暇だろうが、おれはしばらく来られなくなるからな」

「え……どうして？」

シュネイは、ふいに思い出したようにそれを伝えてきた。

ステルンは急にそんなことを言い出した彼に首をかしげて、なぜなのか理由をたずねてみる。すると青年は、数度首を横に振ってそれに答えた。

「そうか、ステルンは気絶してたんだっただな。……あの時お前を捕まえた子供がいただろう。あれに、ビルケ隊長がさらわれた。おれは責任を取るために、隊長を探しにいかなきやならない」

「ビルケ、隊長……？」

「……銀の槍を持った、髪の高いエルフェの女性がいたのを見てな

かったか？」

「あ……」

さきほど自分を魔物の手から救った女性だ。見忘れようはずもない。その人が、自分の代わりに魔物にさらわれたというのだろうか。

「だけど……！ あの人がさらわれたなら、責任はあたしにあるはずでしょ?!」

「責任がステルンにあるなら、それはステルンを集落に運び込んだおれの責任ということ、だな。それにこれはエルフェの問題だ。人間には正直、関わって欲しくない」

言外に自分を連れて行けと訴えるステルンに、シュネイは冷ややかな態度でかえしてきた。ふう、と軽いため息をついて瞼をおろし、彼女が関わってくることを気配からも拒む。

「でも」

「それに」

なおも食い下がろうとする少女の言葉を遮って、シュネイは淡々と言葉を紡いだ。

「ステルンはこの深い雪のなかで、おれ達のように森を歩き回れるか？」

「……っ」

「そう。はつきり言ってしまうえば、足手まといなんだよ」

ステルンはそれ以上、何も言い返せなくなる。シュネイはまた背を向け、テントの入り口へと歩み寄った。

「長居してすまなかつたな。……大丈夫。おれがいなくてもミスデル様が、お前の命を無駄に失うことを望んじやいないから」

一度入り口で振り向いてにこりと笑いかけると、彼女の言葉を待たずに外へ出る。表情は見えないが、何かをかたく決意していたような、そんなふうに見えるには見えた。

「あら、お帰り」  
「……おう」

一方、イライラとした表情のまま自分の住居に帰ってきたのは、ブランドだ。

あたたかいテントの中で彼を出迎えた長髪の女性が、ぼろぼろの彼の帽子と上着を受け取りながら、不思議そうに首をかしげる。

「何、その顔。長老様たちのところで、何かあったの？」  
「……………」

ぶすりとしたまま黙り込むブランド。そんな彼の頭を、背伸びしながら平手でぺしりと軽く叩き、アイスはぷくりと頬を膨らませた。

「ブランド。いい加減にして」  
「何を」  
「『何を』じゃないでしょ。あんたいつから脳みそまで筋肉になったの？」

「……なんだそれ。脳みそまで防御固めた覚えはねーぞ」

呆れ顔で言い放ったアイスに、苦笑しながら言い返す。すると今度は、雪に濡れたままの帽子がべしよりと顔に飛んできた。

「んブツ……！ うおお冷てッ！」

「脳みそがまだ柔らかいなら、話をそらさない。私が聞いているのは何があつたか、よ？」

につこりと笑いながら外套を持っていないほうの手で、しゅんしゅんと音を立てるヤカンを持ち上げた彼女。しかし目が、笑っていない。

「ちょ、おまえっ……！！」

「二十年も連れ添えばあんたの行動パターンなんか分かるわよ。さあ、話して」

「わかつたわかつた！ 話すから！ だからヤカンは置け！」

じりじりとヤカンを構えて近づいてきた妻に、ブランドは慌てて態度を変える。

そんなブランドの様子をみて、ふん、とため息混じりに軽く鼻を鳴らすと、アイスはごとりとヤカンをストーブの上に戻した。ヤカンはふたたび音を立てて、湯気を吐き始める。

「でもその前によ。とりあえずこれ、片付けねえ？」

「……そうね」

眉をハの字にさげて、濡れてしまった髪と帽子を示すと、そんな情けない顔をしている夫に苦笑しながら、アイスも同意した。とりあえずアイスが帽子と外套をテントの中に張られたロープにかけて干し、ブランドは濡れっぱなしの頭と顔を手ぬぐいで拭う。



それから、互に向かい合ってテーブルについた。

「はい」

「……おう」

いつの間にいれたのか、カップに入った熱い茶が差し出される。そして何も言わずに、向かい側で茶をすすりだすアイス。なんとなく手をつけられずに、ブランドは妻の顔を伺うようにして話しました。

「……今、ここに人間のガキが一人いんの、知ってつか」

「もちろん。というか、みんなその話題でもちきりよ。この真冬に人間なんて、まず見ないしね」

いまさら何をいいたすのかとおもえば、とても言いそうな顔で、アイスはことりとカップを置く。

「まあ、それが理由で、シュネイもそいつを連れてきたんだけどよ」「そうよねえ。妖精狩りの男どもさえ来ないこの時期に、女の子が一人で、なんて変だもの」

当たり障りのないアイスの相槌に、ブランドは頭の中から何かを払いのけるようにしてかすかに首を動かした。うん、とため息のような唸り声のような音を漏らし、しばし沈黙する。

それからずるずると手を伸ばし、目の前のカップの中身を一口、ゆっくりとすすった。置いたカップを掌の中でいつまでも弄ぶようにいじり、次の言葉を待って自分を見つめてくるアイスからも目をそらす。

やがて至極いいづらいその事実、唇が貼りついたかのように重い口を開く。

「……人間が森に来た理由とか、ミステル様がなんで滞在を許しているのかはよくわからねえ。けど……あの人間のせいで、義姉さんが影に捕らわれちゃった」

「え……？」

姉とよく似たペリドットの目を見開き、夫の言葉に耳をうたがっているのが傍目からでもよく分かる。ブランドは心底から申し訳ない思いで、彼女にさきほどの影との戦闘の一部始終を説明した。

「まさか……姉さんが……」

「目の前で起こったつつつても、俺もいまいち信じられねえけど」

こめかみに片手を当てたまま、いやいやをする子供のようにな度も首を振りながら、彼の言葉を聴いているアイス。聞き終えると悲しげに眉をひそめ、見るからに肩をおとして、出せる言葉もないといった様子だ。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見える？」

「……すまねえ」

「謝らないでもいいわよ。それで？ 人間がさらわれかけたって事は、さっきの召集はその責任の詮議だったんでしょ？」

こくり、とうなずくブランド。だが何かいたたまれない思いで、妻の顔を眺める。

「詮議では、シュネイが責任を負って義姉さんを連れ戻すことになった」

「どういうこと？ 影を呼んだのは人間じゃないの？」

「俺もおんなじこと思った。てかホントはあの場の誰もが、人間を追い出すか処刑するので解決すると思ってたハズだ。だけどそれを、シュネイが庇った」

ブランドはその青い目を細めながら、シュネイの言葉を思い出して、どこか悔しげにそうつぶやいた。

アイスはそんなブランドの様子で、彼がなぜテントに帰ってきた時にイラついていたのかを察したようにひとつ、うなずく。

「つまりあんたは、人間が気に食わないんじゃないで、人間が影を呼んだ事実をシュネイがわざわざ捻じ曲げるような真似をしたのが気に食わなかった、ってわけかしら？」

その鋭い指摘に、おもわず目を見開いて妻の顔を凝視するブランド。

しかし彼女は、むしろ心底あきれたような表情で、自分を見つめてくる夫のその顔にため息をついた。

「ほんつとにあんたって人は……惚れ惚れするくらい馬鹿ね」  
「どーいう意味だ」

むくれた顔で聞き返す声に、アイスは吃と、夫の目を睨み返すように見つめて答えた。

「どうしてあんたは、人の気持ちを考えてあげられないのよ。シュネイがどうしてその人間を庇ったか、知ってるの？」

「……それは……」

言いよどむ彼に、更にアイスの言葉が降りかかる。

「確かに姉さんをさらった影は、シュネイの言うとおり妹さんの堕ちた魂なのかもしれない。連れてきた人間も、その妹さんに似てるのかもしれないわ。けれど外面しか見てないあんたに、何がわかるっていうのよ？ 私情かもしれないけれど、シュネイが長老様たちの意向に逆らってまで、どういう気持ちで人間を庇っているのか、あんたなんかにわかるの？」

どうしてそんなに怒るのか。

鬼のよう、とまではいかないが激しくまくしたてられる言葉の雨に、ブランドは面食らって動けなくなってしまった。俺は何も悪い事を言った覚えはない、ときよんとしている夫に、アイスの目がきらりと光る。

「ちゃんと聞いてる？」

「聞いている。聞いてはいる。けど……」

「けど、何よ」

「なんでお前が怒る。俺は何も間違ったことなんかしてねえだろが」

はああ……、と長い長いため息をついて、アイスはブランドの理解のなさに再びこめかみに手をあてる。

「間違つてるとか正しいとかの問題じゃないでしょ。なんでよりによつてあんたが、シュネイを信じてあげられないのよ」

「え？」

「あんた、シュネイが流れてきたとき、なんて言っただけから庇ったっけ？」

急に言われても、すぐには思い出せない。何しろシュネイがヤーレスツァイトに流れてきたのは、三十年ちかくも前のことなのだ。基本的に勢いで行動しているブランドに、そもそもそんな知能を

求める方が間違いというものだが。

「まさか覚えてないの？」

「そんな前のことなんざ覚えちゃいねーよ……」

がしがしとばつの悪い顔で頭をかく。弱々しい声で肯定すると、  
アイスが仕方なさそうに教えた。

「あんたね、よそ者の歌うたいなんか信じられないって騒いでた集落の皆の目の前で、『俺は信じる。人間じゃあるまいし、なにかたくらむような心根じゃあんだだけ歌えねーだろが』って言ったのよ」  
「……………」

「歌うたいのことなんてなんにも分からないはずの、あんたがね」

シュネイやガイゲのような戦いの歌こそ歌うことは出来ないが、  
アイスは祭りなどで精霊へ呼びかけることに關しては、それなりの  
力をもつ歌い手だ。

だからこそ、その小さな一言は、ブランドにとって重い。

「そついや、そんなことも言っただけ、な」

言われてその時のことをようやく思い出し、顔をかすかに赤らめて  
ずるずると茶をすすする夫に、彼女はふ、と笑みを浮かべた。

「やっと思い出した。……だからね。他の誰がシュネイを疑っても、  
あんただけは支えてやらなきゃ。そりゃあ友達つてのは他人だもの、  
意見の違いで喧嘩になる事もあるわよ。兄弟でさえ大喧嘩するんだ  
から」

ゆっくりと、幼子に言い聞かせるように言葉が紡がれる。

「だけどそれでも、相手の様子がおかしかったら気遣ってやれたり、離れてもまた自然に繋がったりするのも、友達ってもんじゃないの？」

ブランドは急に恥ずかしくなつて、彼女から目をそらした。するとアイスは、笑いながら立ち上がる。

「今のあんたに出来ること、考えなさいよ。まあ、あんたみたいな脳みそ筋肉に出来ることなんて、そんなにないでしょうけど」

「……るせえな、脳みそ筋肉だのバカだの、あんまり亭主に連発するもんじゃねえよ」

「あら。亭主以外、誰に言えるつてのよ？　こんなこと」

お互いに笑いながら、いつも通りの悪態をつき合う。

アイスはポットにまた新しい湯を注ぐと、ブランドのカップに熱い茶を継ぎ足した。ふわりと広がる心地のよい香りに、ブランドはサファイアの目をゆっくりと閉じる。

それから後ろを向いた青み混じりの黒髪に、その目を開いて小さな声で呟いた。

「ありがとな」

その声が聞こえたのか聞こえなかったのか。彼の妻は忙しそうに、家事の続きを始めていた。

第十一節 A l b t r a u m (悪夢) (前書き)

毎晩、妖精に馬乗りにされちまうた男がいてヨ、参ったね。

厄介なのはその妖精、自分が悪夢を見せるって事実によ、気付いちやいないって事なのサ。

ペルツェ・ノコルの童話集1

「妖精物語」より

## 第十一節 Al b t r a u m (悪夢)

むき出しの地面の上で目を覚ましたビルケが辺りを見回すと、そこはどこかの洞穴の中だった。

そばには愛用の銀槍が、無造作に転がされている。彼女自身もかなり無造作に転がされたらしく、ところどころ体が痛んだ。動こうとするが、縛られているのか腕がうまく動かない。両足も足首や太腿を何かで固められているようで離れないので、うまく起き上がる事ができない。もそもそと芋虫のように体全体を動かしてはみるが、やはり自由が利かなかった。

「……ちッ」

思わず舌打ちをして、寝たまま壁までの距離を目で測った。

……だいたい三マルタといったところか。ゆっくりと足を動かし、地面を蹴って、少しずつ壁際まで転がりはじめ。壁際につくと、岩壁に背を擦りつけるような格好で、ようやく体を起こした。

「……………」

壁に寄りかかったままで、辺りを見まわす。転がされていたのは、幸い穴の口から程近い位置だ。奥のほうへと小石を蹴って、反響に耳をすませれば、そこはそれほど広くも深くもない穴らしいと分かった。

外に目をやれば、洞穴は山の上か崖の途中にでもあるのか、下のほうに雪をかぶった木々が連なっているのが見えた。景色が薄暗い青に染まっているところを見ると、今は夕方が朝方なのだろう。太陽や星は見えないので、今の時刻が朝なのか夜なのかは、うかがい



知ることが出来なかった。

はあ、と大きくひとつ息を吐いて、ビルケは首を回す。周りの様子はだいたい分かったが、肝心の状況が把握できない。

確か、あの子供の姿をした影の奇妙な攻撃に捉われて、真っ暗な闇の中に落ちこんでしまったのは覚えている。その闇の中で少しずつ意識がなくなり、気がつけばこの有様だ。

あんな子供に負けるとは。

我ながら情けないと、ビルケは再度ため息をつく。

ところでここはどこなのだろうか。風の音と匂いから、モンデンヴァルトからそう離れてはいないことはわかる。だが、普段から様々な精霊たちがそこらじゅうで遊びまわっているような中で暮らしているビルケだ。そんな彼女からすれば、ここは死んだ場所と言わざるを得なかった。精霊の声が聞こえないどころか、それらがひそんでいる気配すらしないのだ。

感じられるのは冷たい風の、悲しげに泣きわめく声だけ。ひゅうるり、ひゅうるりと音をたてて過ぎていく、穴の外の乾いた音のほかに、虫の這う様子さえなかった。

「とんでもないところに来てしまったな……」

思わずこめかみを押さえなくなったが、肝心の手はまったく動かせないのである。

……しかし、いつまでこうしていればいいのか。敵の気配も一切ないのが唯一の救いだが。

などと無駄にいろいろと考え込んでいると、気がつけば目の前に何かがあらわれた。音も気配もなく突如として現れたそれを警戒しながら、ゆっくりと顔を上げる。

案の定、あの華美な黒いドレスを纏った少女が、ぬらりと闇に浮かんでいた。暗い色彩のなか、見覚えのある男と良く似た白髪がひどく目立つ。

だが、初めに会ったときのような、あの人を見下すような妖艶な笑みはどこにもなかった。むしろどこか悲哀を帯びたような、そんな目ばかりが印象に残る。……まあ、どちらにせよ目に映る姿と同じような年の子供たちが浮かべるような表情ではない、のは確かだ。

「何をみている？」

何も言わずにただ自分を見つめてくるそれに、すこしばかりいらついた調子で問いかける。

「あなたのところ」

「は？」

問いには、なんとも突飛な答えが返ってきた。咄嗟には理解できずに、ビルケは眉をひそめて少女を見つめ返す。ビルケを見下ろす少女は、訝しげに見上げてくる彼女の視線には一切答えず、ふいと背を向けた。

「冗談よ」

「化け物でも冗談を言うのか……」

「何よ、悪い？」

悪びれもせずに言われて、がっくりと肩を落とす。

こいつは敵の大将のはずだが……と思うと、なんだか急に気が抜けてしまった。思わずため息を吐きながら、首を左右に振ってしま

う。

「……何か、だまされているような気分だ」

「お姉さん、面白いわね」

ビルケの様子を見てクスクスと素直に笑う彼女は、今まで知っていた「影」とはやはり違っている。本人は「闇」と名乗るが、それがいったいどういうものであるかも分からない。

だが、どうやら個人の感情があることだけは確かのようにだ。

「お前は、一体何なんだ？」

考えても仕方ないとばかりに、単刀直入に聞いてみる。すると少女は首をかしげて、問い返すように答えてきた。

「初めに会ったとき、言ったじゃない？」

さも当たり前なことのように返ってきたそれに、ビルケは少しばかり苛ついた調子でもう一度たずねる。

「だから、その『闇』とは何か聞いている。私たちの知っている影とは違うのか？」

「……そうねえ。どうせ暇だし、お姉さんに少し付き合っただけでいいわ」

薄暗い洞窟という場所にひどく似合わない格好の少女は、ふわりと宙に腰かける。空気の上に乗ったように足が浮き、優雅に座るその姿は、地面に縛られたまま足を投げ出して座っているビルケとは対照的だ。

もっとも、そもそもが縛られた成人女性とドレスの少女、という

取り合わせ自体、端から見れば奇妙で仕方ないのではあるが。

「夜の精霊王、ガルデ・シアの事は知ってる？」

「……魔物どもの『もと』を作った、金色の少女のことだったか？  
四刻神に祝福を受けずに生まれた、『最後の双子』の片割れの」  
「ふふ、さすがエルフェ。あたしたちは“黄金王”さまって呼んで  
るけれど。じゃあ、そもそも魔物がどうして生まれるかっていうの  
は知ってるかしら」

何故か嬉しそうに、そう彼女は尋ねてきた。

どうして魔物が生まれるのか。そんなこと、エルフェならば子供  
だって知っている。

「お前は私を馬鹿にしているのか？ 魔物が生まれてくるのは、魔  
物という存在が全ての命の終なるもの、だからだろうが」  
「あら、馬鹿になんてしてないわよ。ただの確認じゃない、そんな  
に怒らないでちょうだい」

上目遣いに噛み付きそうなほど睨みつけているビルケをからかう  
ようにあしらうと、彼女は足を組み替えた。

「そう。あたしたち魔物は、全ての命の終着点」

ゆっくりと、子供に言い含めるように言葉を奏でる。その言葉の  
あとの沈黙に、その言葉を頭の中で反芻したビルケは首をかしげた。

「……『あたしたち魔物』、だと？」

「そう。影も、闇も、みんな魔物なのよ。しらなかった？」

「ばかな」

「驚くのも無理はないわね。あたしも、生まれる前までは知らなか

ったもの。だってエルフェの中では、『影』は魔物と違うものね？」

そのとおりだ。影とは、エルフェが死んだ後に、魂が正しく循環の輪に戻れなかった時に生まれるモノであり、生き物だと定義されている魔物とは違う。

なぜなら、影は“生きてはいない”。

だがビルケ自身が言ったとおり、魔物という存在が全ての命の終着点だとするならば、生きているかどうかは問題ではなく、確かに影は魔物なのだ。

エルフェという命の、魂の行き着く場所。

鈴のような声で笑いながら、少女は相も変わらずふわふわと浮いている。そのねっとりとした視線に、吐き気がした。今すぐにでも槍あの小さな胸を貫いてやりたい衝動に駆られながら、腹の底から目一杯の強がりと厭味をこめてそれを吐く。

「まるで闇になる前の記憶が残っているような素振りだな」

それを聞いた少女の表情が変わる。

言われて初めて気がついた、とでも言うように軽く目を見開き、それからため息と共に悲しげに目を伏せた。

「そうね。きっと、あたしもエルフェだった。ポツリポツリと記憶は残っているけれど、名前も思い出せないのよ……この姿も記憶も、過去の姿を借りた闇。本物のあたしなんて、どこにも居ない」

ビルケに向けてなのか、はたまた独り言なのかの判断もつかぬほ

ど弱々しい声で呟き、怯えるように自らの体をかき抱く。急に表情を変えた少女の行動に、訝しげに眉をひそめたビルケへ向かって、それでも彼女は口元を弓なりに曲げてたずねた。

「ねえ、あたしは何なの？ あたしが知っているのは、黄金王さまの言葉だけ。『憎いならば命を奪え。それが楽しいならばそれもいい。寂しいならば仲間を増やせ。お前は自由なのだ。悲しいならば』

」

いちど言葉を区切り、震えながら次を呟く。

「『そのときは、お前を殺せばいい』」

ビルケは目を見開き、絶句した。

耳に届くと同時に強制的に理解した、紛れもないその意味は。

「……お前は、悲しいのか？」

「わからない。何も分からないの。自分の気持ちなんて、とうの昔に置いて来てしまったもの。闇ってなんなの？ あたしにも分からないわ。うまれる前の遠い遠い記憶を再生しては、むなしさをただ繰り返して、渦の真ん中で振り回されて、ぐるぐるしてるだけなのよ。そんな存在に、答えなんてあると思う？」

涙こそない。だが笑う口元とは裏腹に、少女は表情を壊れてしまいいそうなほどゆがめていた。

黄金王とは、世界とはかくも残酷な存在なのか。

ビルケ自身にも、少女のいう「むなしさ」のような経験はある。それでもビルケは生きていたし、新しいめぐり合いもあった。空いた穴を埋めるだけのものが、まだあったのだ。

ビルケは唐突に、闇のなんたるかを理解した。否、せざるを得な

かった。目の前で震える華美な少女は、確かに「闇」そのものなのだ。

ふ、と体が軽くなった。見れば、縛り付けられていた手と足が開放されている。

「……………」

「もういいわ。なんだか馬鹿馬鹿しくなっちゃった。どこへなりと行きなさい」

また急に表情を変えて、少女は浮いたままひらりと手を振った。ビルケはしばし呆然としながら、本当に自分の手足がついているか確認してみる。それから、ゆっくりと立ち上がって少女のほうを見た。

「……………」

「どうしたの？ 奥に行けば外に出られるし、もう何もしないわ。あなたなら森の音が、モンデンヴァルトに導いてくれるはず」  
「それでいいのか？」

言葉尻をさえぎると、少女はぴたりと動きを止めた。

「よくなかったら解きはしないわよ。あたしは気まぐれよ。それともまた縛らりたいの？」

「いや、縛られるのはごめんだが。……答えを、知りたいとは思わないのか」

「答え、ですって？」

ふん、と鼻を鳴らすと同時に、少女の顔に見下すような目つきが再来する。けれど今はその奥に潜んだものが、手に取るようにわか

った。

「そうだ。お前が見つけるものだから私には答えられんが、一人で見つけるのも難しいだろう。少しならば、お前の“答え”を探すのを手伝っても構わない」

あの目が見下しているのは、ビルケではないのだ。ならばこの哀れな少女に、手を貸してやるのも一興かもしれない。例えそれが、エルフェという存在の根本的な法を破ることになるのだとしても。

「あら、エルフェのくせに掟を破るなんて？」

「ふん。もとより掟破りで追放されてきた身だ。もういちど追放されようと、今更騒ぐこともあるまい。ミステル様なら、妹とともに追い出すような事もないだろうしな」

従うべきは、掟ではなく己の信念。彼女はいつだってそうして生きてきた。自らの意志ではないとはいえ、ふれてしまった真実を無視して放っておけるほどの器用さなど、ビルケは持ち合わせていないのだ。

「……仲間と剣を交えることになっても？」

「私を討てぬようでは、お前を討つことなどできはしまい。特に、お前の生前の兄にはな」

「……………」

ビルケのぶっきらぼうな言葉の、どこが琴線に触れたのか。少女は今まで見た事もないほど輝いた目で微笑む。

「……わかったわよ。好きになさい」



放たれた言葉は高慢。だが、嬉しそうに少女は言った。

第十二節 Nebelhorn (霧笛) (前書き)

ごらん、その岸边に寄せる波の音は、行く手を導く静かなる笛のよう。

君の微笑にも似たその音は、しかし僕を惑わせるのに十分なだけの旋律でもって迫るのだ。

「霧の魔笛」  
スプラッヒエ・ヴォルト詩集より

## 第十二節 Nebelhorn（霧笛）

「……ふあ……」

太陽が昇る前に、鳥の声で目を覚ました。昨夜は遅くまで武器の手入れをしていたから、まだ少し眠気が残っている。

だが、さすがに今日だけはそんな事も言っていられなかった。寝床の上で上半身を起こし、大きく伸びをする。

昨夜も雪が降ったのであろう。テントの中とはいえ、晴れた日よりはやや湿った感じの冷たい空気が肌を刺し、彼は思わず身震いをした。寝床のぬくもりに未練を残しながらも這い出し、水差しから茶渋のこびり付いたカップに水を注いで、一気に飲み干す。眠っている間に貼りついた喉が潤され、シュネイはふう、とひとつ息を吐いた。

食事も取らず早々に毛皮の外套を着込み、もういちど念入りに武器をチェックする。それから弓と矢筒を背負い、その上から旅に必要なものをつめこんだ茶色の背嚢を背負う。腰には革のベルトで剣を止めた。

雪深い森を歩き回るのに慣れた、ややくたびれた風のブーツを履き、やはり毛皮で作られた帽子をかぶる。最後に柔らかい革の手袋をはめて、シュネイはあちらこちらに木屑の散乱したままのテントを出た。

生きて帰ってこられるかもわからない。だが、不思議とそんな事実に対する不安などはなかった。

今までにすこしばかり命を削りすぎていて、感覚が麻痺しているのかもしれない。ふとそんな考えが頭に浮かんできて、シュネイは思わず自嘲に口元を釣り上げる。冴え渡る薄闇の中で、青色に染まった新雪を踏む。ぎゅ、ぎゅ、というくぐもったまま耳に届く音を聞きながら、ミステルの住まうテントの裏手へと向かった。

そこには巨大な檜の木が一本、奥へ進もうとするものの前に立ちふさがるように生えていた。

ひびだらけの低い岩壁を、決りながら生えてきたのであろうその根は複雑に絡み合って垂れ下がり、牙をむく獣のごとく、自分を見上げるシュネイを威嚇している。この檜の大樹が守るのは、モンデ・ンヴァルトの最奥への入り口のひとつであり、ヤーレスツァイトの長は代々その門番の役割も兼ねているのだ、といつかガイゲから聞いたことを思い出した。

「おお、来たな」

「お待ちせして申し訳ありません」

「なあに、気にするな。年をとると自然と早起きになってしまっただけな」

小さな老婆のころころと笑う声が、どこかほっとする。無意識のうちに関心していたのか、と自分でも驚きながら、シュネイは前へ進み出た。

「ゆっくり眠れたか？」

「いえ。正直なところ、あまり眠れませんでした」

「そうかそうか。まあ、お前はそういう所だけは几帳面だからの。わしのような年寄りでは、そんな無茶はできんわい」

そういう所だけ、とかすかな皮肉を込められて、シュネイは思わず少しの苦味を含んだ顔で笑い返す。

しかしミステルは彼の心を知っていて、緊張をほぐそうとしてくれているのだろう。穏やかに微笑みながら、いつものように軽く言葉をかけてきた。

「さて」

と、ミステルは表情を変え、榎の大樹へと視線を移す。

「ここより先は神々の庭じゃ。あの影どもの潜む所は我らには分からねゆえ、ビルケの捕らわれている場所に目星を付けるには、神々の庭の住人に教えを請うしか方法はない。だが、神々の庭は我ら精霊の住まう場所とは何もかもが違う」

よいな？ と疑問系の形を取った静かな声に、シュネイは無言でうなずいた。ミステルもうなずき返し、岩壁のそばまでゆっくりと歩いていく。

それからミステルは雪の上に、杖でなにやら文字のような模様のような、奇妙な形をしたものをいくつか書いた。

後ろから見ているシュネイには、一体何を書いているのかは判別できない。

書き終わると、彼女は懷から小さな木製の水筒をとりだし、中から何かの液体を振り掛ける。雪の上にはばら撒かれた雫が濃い赤紫色をしているところから、その液体が山ぶどう酒だと分かった。

「森の賢者、大榎の霊よ。エルフェの婆の言葉に耳を傾けておくれ」

ミステルは歌うように言う。シュネイたちのように実際に歌った

わけではなく、何かの呪文のような調子だ。

やさしく穏やかなその文言が、かすかに吹いた風に乗せて櫛の枝に届く。風に吹かれてか、老婆の言葉に反応してか、櫛の大樹はざわざわと緑の葉のついた枝を鳴らした。

「おまえたちの庭の懷に、もう一度わしの眷属を受け入れておくれ」

そう語りかけると、周囲の空気がざわりと震える。背筋が痺れるような感覚が走り、シュネイはおもわず息をのんだ。櫛の木とミステルの言葉に依らない対話が、森の奥への道を開く。

シュネイの耳には、りいん、りいん、と空気の震えている音が聞こえていた。

よく晴れた日に、森の中をふいに強い風が駆け抜けると、木々や葉を鳴らした風からこんな音がする。ひどく懐かしいが、それでいてかすかに悲しく思えるような風の調べに似た音に、彼は目を細めた。

「うむ。ほれ、シュネイ。あまり待たせては悪いでな、早う行つてやりなさい」

杖の先で櫛の根元の岩壁に道が開かれたことを示し、ミステルはシュネイを振り返った。岩壁は一見、なんの変化もないように見える。が、よく耳を澄ませば彼女が示した位置から、風の鳴る音が聞こえていた。

「……行つてまいります」

前へ進み出て、ミステルの足元に一度ひざまずき、礼を取る。

老婆はその頭に、深く皺の刻まれた指を乗せて、もう片方の手で祝福のまじないの仕草をした。それから彼女は一步さがり、シュネイが立ち上がるのを待つ。

「たのんだぞ」

立ち上がったシュネイはその言葉に丁寧な頭をさげて、風の音の聞こえる岩壁へと手を触れた。

途端、世界の天地がぐるりと逆転する。  
いや、逆転したように感じた、といったほうが正しいのか。

頭ごと脳を激しく揺さぶられているような感覚に、シュネイは顔をしかめてうずくまり、目を閉じて頭を抱えた。だが目を閉じたところで景色は消えず、足は確かに地面についている感触があるのに、瞼の裏の視界だけがぐるぐると回って気持ちが悪い。

さつきから相変わらず、りいん、りいんと鳴り続けている風の音が幾重にも重なりあって、だんだん頭が痛くなつて。意識が引き伸ばされ、薄くなつていくのが何故かはつきりと分かる。

いったい何が起こったのか、彼に理解できる余裕はなかった。

気付けばいつも通り、厚く雪の積もる森にひとりでいた。

ようやく耳鳴りと頭痛が治まってきて、シュネイはいまだ軽く眉をひそめたままで立ち上がる。辺りを見回すとミステルの姿は既にないが、見慣れた森と特に何ら変わりはないように思えた。うしろを振り返れば通り抜けてきたのであるう岩壁が、木々の根に埋もれて静かにたたずんでいる。

上り始めた太陽の赤い光に照らされている、美しい白の森。だがどこか現実感がない、と思いかけてそこでようやく気付かされる。

時が止まったかのように、ここにはまるで「ゆらぎ」がなかった。太陽の灯、それを反射して煌くはずの雪、呼吸をした空気の流れ。それにしんとしていて、自分のたてる音以外の音が殆ど聞こえない。

木の葉ひとつ揺れないここが、神の庭と呼ばれるモンデンヴァルトの最奥部なのだろうか。精霊たちのさざめきや月ウサギの跳ねる音はどこへ行ってしまったのだろうか？

やや呆然としたまま、シュネイは一步を踏み出した。目に映る色彩は白、青、そして紫。いつもの朝と何も変わりはないのに、命の気配だけがすっぱりと抜け落ちているような……そんな奇妙な世界。

想像していたものとはまるで異なる「神々の庭」の様子に戸惑いを覚えながら、シュネイはあてもなく歩を進める。

「やあやあ。またお客さんかい？」

「くすくす。珍しいわねえ」

と、不意に後ろから声がした。思わずぎょっとして、反射的に腰の剣を抜き放ちながら後ろを振り向く。

するとそこにいたのは、緑の服と緑の帽子の奇妙な二人組。片方



は男で、片方は女だ。

「やあやあ、ずいぶん戸惑っているみたいだねい」

「くすくす、それはそうですね、ここはエルフェの森とは違うもの」

後をつけられていたのだろうか？

微塵の気配も感じなかったことに驚きながらも、シュネイは彼らを睨みつける。

が、まるで心を読まれたかのように戸惑いを見透かされて、狼狽したのが顔に出てしまったのだろう。女のほうで、持っていた短い傘で剣にこつこつと触れる。

「くすくす。初めてじゃあ、驚くのも無理ないですわね。ちゃんと説明してあげますから、まずはその物騒なものを収めなさいな」

女の傘に触れると、不思議なことに、ふ、と剣を支えていた腕の力が抜けてしまった。そのままさして力も込もっていないであろう傘に押しやられ、なんだか動けないまま剣を下ろす。

「あの」

「やあやあ、申し遅れたねい。僕はステツヒエパルメ」

「くすくす。そうですね、この森のとある樹木の霊の長、とでも言えばいいのかしらねえ」

「……………」

問いかけようとしたことを先に答えられて、ぐ、と言葉を飲み込んだ。どうも聞こえたこととや、やろうとしたことを先回りされているらしい。ミステルが「心を読む」ので、行動を先回りされること自体には慣れているが、彼らの場合はそれがあからさま過ぎて気持ちが悪い。

「やあやあ。気持ちが悪いとは心外だねい。仮にも神霊に向かって  
サ」

「くすくす。仕方ありませんわよ、彼はこの庭が初めてなんですもの」

やはり彼らも、相手の心を読むのか。言葉には出していないはずの思考を悟られて、確信する。

そこでシュネイはようやく息をついて、剣を鞘に納めながら改めて彼らの姿をまじまじと見た。雪の上ではなんとも鮮やかに目立つ、緑の服に緑の帽子。端々を少しずつ破いたような、一定しないとげとげした縁のラインをもった、奇妙な服だ。

全体としては二人とも、人間の「貴族」と呼ばれる一族の服装に似ている気がする。男のほうはループタイの飾りと短いステッキのもち手に、女のほうは帽子とネックレスに、それぞれ赤い色の石があしらわれていた。

顔は互いに良く似ている。女のほうがやや睫が長いくらいか。顔に描かれた模様と服装の違いから、だいぶ異なる印象を受けはするが、よくよく眺めると双子のようにそっくりだ。

神霊だと名乗ったが、ステルンよりやや年下のように見える容姿のために、どうも胡散臭く見える。

……いや、本来は妖精や精霊といわれる類のモノの外見が、年齢に左右されるような事はほとんどないのである。重ねた齢どおりに外見を変えていく、エルフェのほうが珍しいのは分かっていた。

そう、分かっただけだが、どうもエルフェと似たような、妙に質感のある姿で目の前に出てこられると調子が狂う。

「神霊様とは知らずとんでもないご無礼を。どうかお許しください」

しかし神霊だと言われたからには、彼らより低位の精霊であるエルフェが頭を下げぬわけにはいかない。ゆつくりとひざまづき、左の拳を右の掌で包み込んで祈るような、エルフェ式の礼をとる。

「くすくす。今更そんなに改まらなくてもいいのにねえ?」

「やあやあ、こっちこそ調子が狂うねい。……ま、急に出てきて神霊だなんて、胡散臭いのはわかるけどサ。あっち側の門番がアイヘルなら、こっち側の門番が僕らステツヒエパルメってところかな」  
「アイヘル……?」

聞き覚えのない名に首をかしげる。すると男のほうで、苦笑しながらステツキを宙でくるくると振り回した。

「やあやあ、思い当たらないかな。君も見たはずだよ? ミステルが声をかけていたろう?」

「くすくす、大きな櫛の木の霊ですわ。岩壁のむこう側に生えていた」

ああ、なるほど、とシュネイはうなずく。ミステルが話しかけていたあの櫛のことか。

すると自然に、彼らの語ったふたつの名前が、一つの法則に従っていることにも気付かされる。彼らのいつている樹霊の呼び名は、エルフェの個人名と同じく精霊時代の言葉なのだろう。ずいぶん昔に習った覚えのある、古い言葉で歌う曲を思い返して、シュネイは納得した。

ということは、彼らは。

「ではあなた方ステツヒエパルメというのは、柊の神霊なのですわ」

シュネイが確信をもってそういうと、目の前の二人は一瞬きよんとしてシュネイを見つめたあと、顔を見合わせてさざめくように笑った。

「やあやあ、まさか当てられるとは思わなかったねい」

「くすくす、さすがは古き神の血を引く一族つてところかしら」  
「……………」

いちいちこちらの言葉を茶化されるので、少し疲れてきた。軽くため息混じりの息を吐く。

そうだった。本来、植物に宿る精霊というものは子供っぽく、自由奔放な性格をしているものがほとんどだった。冬になると大抵の精霊がなりを潜めてしまうので忘れていたが。

思わず眉をしかめかけて、慌てて表情を保つ。心を読む彼らにそんなごまかしは効かないだろうが、と思いながらもこめかみを揉みほぐしたい衝動をこらえた。静かに、彼らの次の言葉を待ってみる。

「やあやあ、いつまでも本題に入らないのは悪かったよ」

帽子をステッキで軽く叩いて、男の方がシュネイに謝罪する。どう返していいものか考えあぐねているうちに、女の方が鮮やかな口紅をつけた唇を相変わらず吊りあげたままで、口を開いた。

「では説明して差し上げますわ。私たち門番の役目は、この庭に侵入したものの見定めを行うこと」

「この神々の庭というのは、過ぎ去った時代の環境を残した……時の狭間に忘れ去られた場所だね」

表情は笑みを貼り付けたままなのであまり変わりはないが、先

ほどもでの人を小馬鹿にしたような言葉遣いを一変し、二人は説明を始める。

「そうねえ、あなたたちの言葉で言えば“精霊時代”の環境をそのまま残した場所、という事になるのかしらね？」

「そうだねい。けれどこの時から忘れ去られた場所に、現の時を刻むものたちがあまり無闇にやってくると、その秩序が壊されてしまう。だから僕らのような樹木の霊……つまり、時の流れにあまり影響されない性格をもった精霊が、その門番を務めているんだヨ」

精霊時代。それは全てのものが完全なる無を知ることなく、いたるところに精霊たちの闊歩していた時代のことだ。その頃は誰もが精霊と言葉を交わすことができ、神々もいまだ地上に君臨していた黄金の時代だったという。人間の死者の魂からエルフェが形作られていた、という話もその時代の伝説、ひとつの昔話だ。

「ではこの場合はおれが、“現の時を刻むもの”なのですね。そしてここは、時の止まった場所である？」

「んんー……その表現はちよつと正確さに欠けるねい」

「季節の流れは外側と同じ、繋がってはいるの。月の森に雪が降る時期には、庭にも雪が降るけれど……この雪は冬の間中、いっさい融けることはないのよ」

なんだかややこしい話になってきた。シュネイは彼らの話を理解しようと懸命に頭を働かせていたが、どうにもその言葉だけでは理解しがたい。

きつと自分の感覚がブランドたちに理解されないのと似たようなもののだろう、と考えることにした。心の声を聞いたのか、ステツヒエパルメがやや眉尻を下げて、困ったように首をかしげる。

「……まあ、これも仕方ないですわね。ずいぶん頭の回転が速いみたいだから、もしかしたらと思いましたけれど……やはりこの庭のことを理解できる輩がそういるとも思えませんか」

「だねい。ま、僕らの同胞でも、正確に理解してるのは少ないわけだし」

ため息混じりに吐かれた言葉がすこし悔しくて、シュネイは彼らに対して自分なりの解釈を伝えてみる。

「ええと……この場所は、あの壁の向こう側とは季節だけが繋がっている。似てはいても違う時間の流れに属しているから、そこにおけるような異なる時間を無闇にもちこむと、その場所としての理が乱れるおそれがある。だからあなたの方が審査する、と」

「ざっくり言えばそんな感じですよ」

ぱつ、とフリルのついた日傘を開き、これ以上は教えても無駄だと思ったのか、女の方が感情を消した顔でにこりと笑う。雪を背景に背負いながらの日傘とは、これも奇妙な光景だ。

「というわけで審査は終了。キミはどうやら本物の神の血族らしいねい？ いや、なかなか面白い」

「え？」

シュネイは目を点にして二人を見つめた。いつの間に審査などしていたのだろう。精霊の審査だというから、一体どんな難題を出されるのかと身構えていたのだが。

「私たちがみるのは侵入者の“こころ”ですわ。エルフェのミステルと似ている、かしらね。改めて神々の庭へようこそ、シュネイ」

「……あの、ええと」

「その疑問に説明するのはいちいちきりがなくて面倒だからねい。ただの手続きだからあまり気にしないように。どうもキミは真面目すぎるくらいがあるようだ」

こつこつ、とシュネイの頭の側面をステッキの先で軽く叩く緑の男。

思いがけない指摘をされて硬直していると、彼は無邪気な笑みを浮かべて、ステッキを引いた。それからその腕をシュネイからみて右手へと向け、ステッキの先をくるくると回して何かを示す。

「今朝は先客がいてねい。キミが来る前に滞在許可を出した。彼らはあっちに向かっていったから、良かったら行ってみるといい」

男が言い終えるか終えないかのうちに、女が困った顔でちよいと男の服の裾を引っ張る。

「くすくす、大事なことを伝え忘れていますわよ」

「やあやあ、これはうっかりしていたねい。この庭では、外の世界の常識は通じない。それと、キミたちが生きるのに最低限必要なもの以外を殺してはならないよ。あとは……そうそう。冬には決して水を川や泉からとって飲むではならない。かならず天に住まう神々からの賜り物だけを使うんだ」

口調とは裏腹に厳肅な顔で語りかけられたので、シュネイも思わず神妙な面持ちになってうなずいた。すると二人はふ、と柔らかな表情になり、まるで夢であつたかのように……空気の中へと溶けるように消えてしまった。

残ったのはまぎれもない彼らの足跡と、しんとした時の気配のない、この場所の奇妙な感覚だけ。

シュネイはしばし呆然と立ち尽くしていたが、よくよく耳をすませてみれば、はるか遠くに人の話し声をわずかに聞き取ることができた。

なぜかどこかで聞き覚えのあるような音の群れに、シュネイは思わず口元を緩め、安堵する。それからその音を道しるべにして、ステツヒエパルメの示した方へと歩き始めた。

時間を忘れたからなのか、まるで新しい柔らかな雪を踏む音が、濃い緑の木々の間にこだましていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5887i/>

---

Sternklare Nacht

2010年10月11日18時09分発行